潮が變つて居る。

之れを消化することを忘れて、之れに反抗し、又は強て眼塞ぎ、耳を蔽ふものがある。卑怯である。

眞に、我れは日本人也と言ふには、世界的變化に、本當な理解の眼、心の眼がなければならない、夫れを少しもお分りが無く、只自分の攫んだものにのみ、こりかたまつて、死んだものになつて、夫れで徒らに、他を排するのは人間眞實の態度では無い。

思想は、生命其ものだ。肉は思想の表現。物質は精神の固結したものとすれば（ベルグソン）吾等は、先つ思想に生きなければならない。

生きると云ふことは、こりかたまる事では無い。こりかたまるのは、死んだことだ。生命は常に生きて、流れて居る。

思想も生きて流れて行かなければならない。頑たる岩の樣であつてはならない。

生きるには、同化と、消化がある。新陳代謝がある。

夫れを忘れた古いあたまは愈々世界から、生存から棄てられて行く。止むを得ない。死骸は腐らねばならない。

古いものは、目さめて生きよ。

物のしひたげを如何に

吾等の今の生活は、盡く物にしひたげられて居るものに過ぎない。

物の爲めに、人が極度迄苦しんで居る時代だ。鬪爭も、排擠も、戰爭も、罪惡も盡く物を爭ふより起つて居る。物を獲んとする衝動の爭ひからのみ吾等の世界は、色濃く染め成されて居る。

切言すれば、吾等は、物の壓迫の下に、あいぎ〳〵生きて居るのに過ぎない。之れで人間であらう乎。

エホバの神は云ふ、

生めよ、殖えよ、地に充てよ。

开んなに殖えたり、生んだりしたら、人間の生活は何うなる。生む所では無い、白人は、殊に佛人は、避姙さへも道德として居るでは無い乎。

二人以上の子を生まないことを當然として居るでは無い乎。皆生活の不安を恐れるからだ。何處に殖えよ、充てよと云ふことがある。

吾等は、物にしひたけられて居る。資本對勞働者の爭ひも、今の社會問題も、世界戰爭も皆物の爭ひから起つて居る。

「既に有てるのは、更に一層多く與へられて餘りあるに、有たぬものは、其有るものすら之れを奪はる。」

基督の言葉だ。之れが、今は物の上に落ちて居る。

吾等は、今の場合、此物のしひたけを飽く迄甘受することに依つて、別な世界に入る準備をしなければならない。此物の奴隷で終つてはならない。

囚はれを乘り超えて見る月

解放は、總有ものに必要だが、何れだけ其切實さを體感して居る乎疑問である。個人としては、殆ど毎日解放され行かなければなるまい。

解放の反對は、囚はれである、囚はれから解放されることである。

吾等は、毎日、毎刻、何物にか囚はれて居はしない乎。

囚はれないと云ふことは容易でない。

心が、明鏡に一點の水の落ちた樣に、玲瓏珠の如きここは、佛者の求むる理想の極致だ。

斯うなつて、初めて、眞の解放に達する。解放は、如何なるにも、放縱であつてはならない。

囚はれから、解き放たれたものである。

眞の自由である。心の眞の自由は、虛靈不昧の心持。何物にも拘せず、囚はれざる有樣。

吾等は、戀の囚はれから切り離されなければならない。戀の味を充分に味はひつゝ、併も之れから切り離されて居なければならない。

吾等は、金の囚はれから、切り離されなければならない。併も、物の生活、物から受けるなやみ、胃の腑の衝動を中心とする生活の矢叫び、之れからも充分神の鍵を握ると共に、即ち之れを味はふと共に、更に之れ以上乘り越えたものがなければならない。

之れは容易でない。

人間を愛せよ

一體日本には本當の人物畫なるものが無い。僅に求めて佛畫に發見するが、佛畫も、眞に日本人の眞骨頭、日本人の創造に成つたものは無く、多くは支那の感化、甚だしきは、支那の模倣乎、將た飜譯に過ぎない。

西洋でも、人物畫の中心は、宗教畫にあるが、夫れでも日本より遙に豐富な內容に輝いて居る。何所にローマのバチカンにある樣な人物畫がある。

僅に求めて歷史畫。繪の具の展覽會こ錦繪まがひの人物畫を見るけれども、少し

も开所に人間としての權威、人間としての特殊性、即ち歴史の語つて居る英雄の、時、空、位が毫末も躍動して居ない。

人の無限の心理、掘つても掘つても掘り足らない人間の變化、横にも、縱にも、到底自然の石や、山や、水や、鳥獸を以て比することの出來ない神に最も多く似せられた人間の形体美心性美の描寫は、彼等畫工には何んなにしても出來ない。

又日本人が南畫のへんてこな山水や、動植物のみに、其他と雖も、多く此自然の描寫を全く脱することの出來ない幼稚な非生命な、非人間な、貧弱なる再現に馬鹿な金錢的浪費を敢てして居るのは、趣味其もの、低級な爲めでもあり、金儲けの爲めの骨董的好尙でもあつて止むを得ないとしても、モー大概目の覺める時代ではあるまい乎。

何時迄も、骨董、死んだ血の無い山や、水にあき〳〵しないとすれば、日本人の生命の内容も憫れむべきものである。

掘つても掘つても

人體美更に开所に人間心理の絶大な深さを以てする。

美は人間を以て最高に達した。其美、壯、眞を寫すことを忘れた吾等の藝術は、死骸の羅列に過ぎない。

吾等は、飽く迄人間を愛しなればならない。人間は自然よりも、何よりも、最も意義あり、力あり、涙あり、同感あり、血さへも交流して居るもの。之れを愛さずに、山水を愛することは、明かに愚、東洋流乎、將た猶太思想の惡影響である。

吾等は、世界の二大潮流たるヘレニズムを持たなければならない。希臘思想を持たなければならない。

人間の深い〳〵心理の表れに、最大の渇仰と、愛念とを持たなければならない。

盆栽をいじる前に人におつきあいなさい。

小鳥をいじる前に人におもひやりを爲さい。

山水の景色をめづる前に人の美を味はいなさい。

吾等人間は、總てのものゝ極點に立ち、自然の發達の最大な表れである。人を愛するものとならなければならない。從つて最も人の世を愛するものでなければならない。

塵世を愛せよ、开所に神が在る。

美は人の世を措いて無い。深さは人の心を措いて無い。人の身、人の心、人の世を讃美せよ。

巷に出でよ

巷に出でよ。十字街頭に立て。現實にまこともにぶつかる覺悟が無くて何うする。

世の中の火と水は、我れを鍛成する爲めの神の與へた攝理だ。

火、水の中を潜つて初めて銑鐵が鋼鐵になる。之れを實際潜つたもので無ければならない。

机の上や、書物の中で抽象に老へたものでは何にもならない。

自分に經驗したもので無ければならない。自分の血と肉とに影響し、之れを躍らし、之れを冷したもので無ければならない。直言すれば吾が骨に感じたものでなければならない。

夫は經驗だ。實際だ。現實だ。

巷に出でよ。人間苦、世間苦を面と向つてまこともに受けよ。

書物を讀んだ許りで何になる。抽象された、死んだ形式内に何の血が在る。

巷には之れがある。吾等は實感を貰ばなければならない。

文學と實感とは成るべく相離れなければならないが、現實に生きて居る吾等には實感が出來るだけ痛切深刻になればなるほど吾が世界を開く。人格、生命の内包を豐富ならしむ。

巷に出でよ。小さき蜂の巣の群よ。

不平の多い人は仕合せである

煩悶の多い人は仕合せである。新しく世界を開くことが出來る。

不平の多い人は仕合せである。今迄知らなかつた世界を體感することが出來る。

煩悶の爲めの煩悶、不平の爲めの不平であつてはならない。

何かの不合理性乎、又は人生の矛盾に衝突した時、其平かならざる心と、思ひ惱んだ悲しみを凝と耐へて、徐に之れを味ばふ時、开所に眞の人間味、人生味が跳つて來る。自分の世界に入つて來る。

思ひ惱むことを知らないものは、人間味を知ることの出來ないもので、やがて、新らしい意義ある世界を日に發見することの出來ないものである。

不合理中から、合理が生ずる、矛盾の内から調和が湧き出る。

矛盾と不合理を回避するもの、衝突と煩悶を拒斥するものは、自ら小にするもの神の與へた大きな攝理に背を向くるもの。

吾等は飽く迄人間味を味はふべく、矛盾、不合理、衝突、煩悶の眞ッ只中に立たなければならない。然り立たなければならない。其天うつ波の進化退化の大きな潮の中に、不調和、不純一な狂瀾の眞つ只中に。

泥の中の清水

そつこしろ、人の心こ井戸の水、かきまはしては總て泥が。かきまはしては、何故濁らの乎。若し眞に徹底して清んだ水ならば、濁り樣が無い。濁るのは、まだ徹しないからだ。

併し何物か能く徹することが出來る?。人間のことは一つも最う迄徹して居るものは無い。吾等の心は一以て全を覆ふことの出來無い樣に出來て居る。一つことを一本の棒の樣に、最後迄推して行けば、如何なる善でも、必ず惡になる。

愛の裏には屹度憎が在る。全く相反したものが其内包に隱れて居る。寧ろ裏附けて居るかも知れない。

幸の内面には必ず不幸がある。幸ばかりが、ズツト永續するならば、反つて不幸であるかも知れない。

神話に在る樣に、黄金を慾しい金色夜叉的人物でも、總てが黄金になつたら居たゝまつたものでは無い。飲む水も、持つ茶碗も。

吾等は常に變る。生きるこ云ふことが初めから變ることこ、其事なのだ。

若し憎みに隣しない愛を持つことが出來れば、夫れは人間で無くて神だ。神にして初めて憎の無い愛を持つことが出來るかも知れない。

從つて何物にも徹することが出來ない。

泥を底に持つての清水だ。かきまはせば必ず泥こ水この區別が混同する。此所に大きな人間のあやまりが出來る。

吾等は泥こ水こを嚴重に區別して置く所に其清さを持つ。然り單に其區別を存すこ云ふこと、只夫れだけだ。之れが人生だ。決して一本なることが出來ない。

骸骨の踊りたる職業

骸骨の踊り。死骸の踊り。こんな矛盾な、悲慘なことがあらう乎。

骸骨が踊りをおどつて居る。金の爲めの骸骨が。名の爲の骸骨が。職業の爲めの骸骨が。生活の爲めの骸骨が。

金の爲めに、生活の爲めに生活しなければならないものは骸骨の踊りではあるまい乎。开所に精神がなければならない。

魂の無い踊が何にならう。精神の無い職業が何にならう。吾等は金の爲め、生活の爲めの職業であることを欲しない。开所に充分な精神が無ければならない。

夫れが無ければ骸骨の踊りに過ぎない。

總ての職業は、精神を要求されて居る。魂の花を要求されて居る。

魂の花を踊りの生命として初めて、其踊が血と肉とを持つ神の表徵たることが出

智識的勞働者、智識を以て生活の方便とする文藝、哲學、教育者の立場は、飽く迄も精神を以て、魂の花に生なければならない。金の爲め、名の爲め、生活の爲めの死人の踊り、骸骨のおどりであつてはならない。

自分の立場に精神の高い共鳴と、强い價値觀念を持たないものは、皆骸骨の踊りである。屍の舞踊に過ぎない。

今の食ふ爲めの生活者、農工商の人々は多くは之れではあるまい乎。屍のうめきではあるまい乎。其智識的勞働者と云ふものすら。

お世辭を言ふものがあつて、

卵子が生みたての儘、かあーさんの貴女に似て居る。

と言つたものがあつたら何うだ。

卵子の儘に、モーお母さんに似て居るこ云ふのだ。

こんな滑稽が至る所に在る。

吾等は、吾が眞實に生きなければならない。お世辭や、好意に生きる樣な意苦地無しでは駄目だ。

飽く迄我が眞に生きよ。眞は特殊で、普遍だ。

シエクスピヤ出世の緣

人間の出世の緣こ云ふものは、おかしなもの。詩聖シエクスピヤは、鄕里に居て十八歳六ヶ月で女房を持ち、廿三歳で學校を止め、田舍之居の眞似をして笑はれ、遂に村の若い衆こ共に領主の鹿を戲れに盜んだのが動機に、ロンドンへ飛び出した

此鹿を盜んで田舍に居られなくなつた爲に、彼れの出世のいこぐちがあつた。

奇しきは運命の神の吐き出す糸である。

小骨の多い日本人

日本人には何うも小骨が多い。知らずに食ふこ必ず咽喉に引つかゝる、恰度信州名物の鯉だ。海魚の無い所から、淡水の魚を食ふ。淡水魚中の王こも見るべき鯉は勢ひは凝滯だが、食つて小骨が在つて仕方が無い。

小骨が無いこ、鯉も相當に食ふ方法があるけれども、如何せん、肉の中に骨が、やたらに交つて居る。海の魚の樣に大骨さへ拔けば、其他には少しも骨の無いこは食ふ心持が違ふ。

日本人は恰度此鯉で代表されて居る。元氣も善いし、精氣もあつて、時には瀧をも、さかのぼる勇心があるが、何うも大きなことが出來ない。大局に明を失する。小さい喧嘩、小さい利口、小さい骨、之れだ。大きな骨が欲しい。肉だか骨だか分ならない樣な小骨の無いことが願はしい。此小骨が何になる。吾等は小さい骨を拔かなければならない。小理屈に拘泥することを止めなければならない。小さい感情に弄ばれることを避けなければならない。

危險な遊戯視せよ

人格は何にでも現はれる。碁を打つても其人格の表はれが歴々とするが、人生人格の磨擦を、圍棋以上に相爭はしむる必要が無い。

吾等の競爭も、鬪爭も、單純な碁を打つ位に思つて居ればいい。

一種の遊戯である。最も興味ある遊戯慾の表現である。

之れを遊戯以上に見る所に過迫があり、惡感があり、不快がある。

選擇の遊戯、ニイチエをして言はしむれば、勇氣ある男子は、危險と、遊戯に、其餘裕を發見すると云ふ。

そして其遊戯が危險性を帶ぶるほど面白いのである。

五人塵殺の悲慘

越後に五人殺しがあつた。夫れは、其一家の末子、舞鶴海兵團に行つて居つた放蕩兒の仕業で、財産を相續する能はざる不平と、之れを得るに近い手段として、先づ其兄妹三人を絞殺し、更に繼母を一刀の下に刺し通すと共に、何事も知らずに野良より歸り來れる吾が實父を背後より刺して、吾一族尊卑親緣の全部を塵殺し去つ

た。凶悪こ言はうか、獰猛こ言はふ乎、殆んご日本の様な家族國に見られない極端な罪悪を敢てし去つて居る。

天下之れだけの凶悪が又こあらう乎。そして其目的こ出發點こは、皆金である。金の爲めに、五人の親縁を盡く葬り去るに至つては、吾等は、何の言葉を以て之れを形容するここが出來やう。

皆金が禍を爲して居る。

此唯物主義には、親も、子も無いのである。金の前には、あらゆるものを犧牲こするのである。此唯物主義が曾ては善ささへされたのだ。

吾が祖先を言ふ時

墓誌は、何こも言へない一種の情思を與へる。祖先、肉親の墓銘に對する時、過去幾世の歴程、初めてしみ〳〵こ吾れに迫るを覺える。

單純に、過去幾千年こ言つても夫れは極めて抽象的なものであるが、吾が祖先こ云ふに至つて、其無言の墓誌銘に對する時、過去は、單なる過去で無くて、具体的に、連續的に吾れこ吾身につながるものこして、一道の深い、長い線を明白に既往に引張つて行つて呉れる。

或は吾が幼時こなり、或は我が母、我が弟妹、綿々たる情思は、夫れから夫れへこ、親縁の盡きせぬ思ひ出こ共に、吾れをして全く小兒の如くならしむる。

汝等小兒の如くなるにあらずんば天國に入る能はすこは。耶蘇の有名な言葉だか全く此間一點の邪念も無い。野望も無い。只純なるもの。素なるもの。吾等は一年一回は、此子供の生活に歸るここを必然こされて居る。然り誠に歸るのである。

梁の武帝は、有名な佛徒であつたが、一冠三載、一被二年と云つて居る。一つの冠で三年間を通し、一つの衣物で二ヶ年間に亘ると言ふのである。今の百姓や、町人に此一念さへあるならば、貧乏は少しも恐るゝに足らない。人間は貧乏でも暮らして行けける。此暮らして行くと云ふ所に、個人の強味がある強いて榮華を夢みんとするが故に、弱い所がある。人間の弱いほど憐れなものは無い。

吾等は威武も、富貴も屈することの出來ない眞の強味を有して初めて、此世の中に頂天立地、何物も恐れないことが出來るのである。

眼を半眼に開け

眼を半眼に開け。全部を開くナ。半眼とは、半ば閉ぢ、半ば開くことである。開いた半ばは、世間を見よ。現實に開け。閉ぢたる半眼は、常に我れに返れ。回光返照せよ。

現實に毒せられてはならない。現實にばかり拘泥してはならない。吾等は現實を照すに、自我の光を以てしなければならない。

外に與ふる光を、我れに返照して、我が主觀内に天地を發見しなければならない眼を半眼に開いて閉ぢたる半眼は、以て無限に達せよ。無窮に及べ。絶對を味はへ。如來に遊べ。

吾等は閉ぢたる眼に依り、我が心を通して天を見る。星を見る。开所には無限大を見る。無窮大を見る。吾等は、必ず半ば閉ぢたる眼を有することを要する。

餘りに大きく眼を開いて、我れに歸ることを忘れた現實の惑溺者は、以て天地に

遊ぶことが出來ない。矛盾、衝突、惡魔、煩惱、罪惡に充ちた現實に、我が全部の眼を開けて我と我が主觀を忘るゝ者は、只死あるのみ。

現實に毒殺さるゝ乎。他の役となる乎。自我を自我たらしむることゝ能はずして世間の飜弄する所となる乎。

吾等は、自我の眞實に最も忠なるものでなければならない。夫には只我半眼がある。

全く閉づるナ。併も全く開く勿れ。

惡魔さへ天使だ

「人間が、あらゆる幸福を知るには一日で澤山だ」一日生きて居れば、以て生の全部の樂みを樂むことが出來る。

門に道を聞いて夕に死する可なり。

私達は天國に居るんですが、只私達はそれを悟らない許りですヨ。小鳥よ、幸福な小鳥よ、私を許してくれ、私は又お前に對しても罪を犯した。私の周圍には到る所に神の榮光がある。鳥にも。木にも。牧場にも。空にも。私は只それを知らずに汚れて居るのだ。その美と光榮とに氣が附かなかつたのだ。

こんな心持ちに、本當になつて居たい。こんな心持ちに醉つて居たい。

幸福は一日でも足り樣。人世は、到る所天國であらう。

只我等の心持ちが井所に到らない。

總てのものに祝福あれ。總てのもの皆、輝け。春は近い。春だ。春だ。

生涯を貫いて春だ。

考ふべきは、獨り自分の心持ちだ。心持ちさへ春なれば、三冬亦花だ。地獄さへ

極樂だ。惡魔さへ天使だ。

この心持、主觀。やがては氣分。鬼も、佛もごろ〳〵して居る。

不幸な幸福に

恐るべきは自分だ。自己だ。他人では無い。幽靈でも無い。怖いものは斯の世の中に只一つある。夫れは自分だ。自己だ。

自分ほど恐るべきものが何所にあらう。一切は、皆自分から來る。

運命だなんて、ごまかして行くけれども、殆んど大部分は自分だ。自分の心持ちだ。自分の態度だ。

自分の態度(心持)が一切自分に報ひて來る。

佛敎の三世因果は、之れを擴張したものであるが、來世迄業報を持つて行く乎は哲學的に許容することが出來ないけれども、恐るべきは自分なることを、最も凱切に言表した點、慥に佛敎の偉大である。

總てのものは、皆我が主觀の反映と言つても差支無い。主觀の態度で幸福を不幸にし、不幸を幸福にする。

幸、不幸は、結局主觀的なものでも、受ける人に依つては反つて幸福になるかも知れない。不幸と云ふ客觀的事實、假令ば病氣でも、其病氣の攝理及病氣を乘り越して進む主觀の大きな經驗に依つて、病氣は非常に其個人に對する福音となるかも知れない。

恐るべきは自分だ。一番嚴肅なものは自分だ。自分より嚴肅なものは無い。

世の中に恐るべきもの、怖いもの無はい。幽靈、怪物も何も恐ろしくない。獨り懼然として恐るべきは獨り我れあるのみ。自分だ。自分だ。

縱令何んなことでも、自分の行爲には、自分に全責任を負はなければならない。

其結果が間違つても。誤解されても。何んなことになつても。

吾等はソクラテスの心持ちになることを要する。ソクラテスは、青年を導き、デルフオイの神託を宣べん爲め、精神の「産婆」たらんとして遂に、敵黨の爲め死刑の宣告を受くるに至つた。開して其牢獄を逃るべく總ての準備を弟子共の講じて早く一所に船に乘つて下さいと言ふのを一顧だにせず、斷として死を味はつた。

彼れは、よし誤解であつても、無實の罪であつても、アゼンの名に依つて行はれたる法の森嚴に、飽く迄從順であらねばならないことを說いて、遂に、毒酒の一しづくをも殘さず呑み乾した。

自分の仕たことは最後迄自分に引受けなければならない。

よし間違つて居ても、見當違ひであつても。而して極端な誤解であつても。

人生は初めから矛盾である。其矛盾の氷を自分の涙で溶かして行くのが吾等の世界だ。矛盾も、誤解も、皆人生だ。ソクラテスは此氷の山を、自分の力で溶かして行つた。

之れでなければならない。人生の矛盾、誤解、衝突に女々しく泣くものは、此氷を溶かすことが出來ない。

女々しき涙は、益々現實の氷の山を高うするばかりである。吾等は、人生を味はふ力の涙に於てのみ人格の森嚴を高調することが出來る。飽く迄女々しき涙であつてはならない。

人生は、裸體で生れて裸體で死んで行く途中の衣物の良否に過ぎない。

良い衣物を着て威張つても元來が裸體で生れたものだ。何を开んなにおらがるのだ。

哲學や、人生味の体感の無い人々は、氣の毒だ。

從つて、途上、五十年の衣物の良否位に(貧富)、魂を奪はれて如何にも大きな泣き騒ぎをやつて居る。

人生の高をくゝれ。

衣物の少し良いのが、悪くなつたつて、首をつツたり、腹を切つたりする。

或は神經衰弱に落て、あたまの中樞が滅茶〳〵になる。

之れで、何所に生き甲斐があるのだ。

人生も、こんなことに囚はれて、一生を終つたでは、何の事は無い豚だ。

裸體の儘、自然の儘のお前の血を考へて見よ。

お前の血は、以て他に誇るに足るもの乎。

おまへのあたまは、以て其衣物を凌ぐことが出來る乎、出來ない乎。

甚だしきは、其衣物にすら價せないものでは無い乎。

お前は、無智を誇つては居ない乎。お前は自分の價せない其衣物にほこつては居ない乎。

其眞を見よ。人間は衣物では無い。

世の中の衣物先生よ。

酒に醉ふ乎道に醉ふ乎

酒に醉ふ乎。醉ふては身心を害するが、醉ひ心地は、吾等に、何事をか語つて餘

りある。

醉はなければ居られないのだ。

酒に醉ふ乎。詩に醉ふ乎。女に醉ふ乎。若し夫れ道學者先生ならば、道德に醉ふこと言つたら、一番お氣に召すかも知れない。

あゝ、醉つて居たい。身心を害さない强い醉心地に居ることは出來ない乎。

所謂陶醉。ニイチエならばデイオニソス的陶醉。身も世も無い樣な興奮。

酒は、此點安價なる醉心地を與ふる所に、其根本の存在を持つて居る。

貧乏な勞働者でも、一日の勞苦を、酒に依つて忘れたいのだ。單なる肉体の疲勞を忘れたいのでなくて、此現實の黑暗々たる自分の不幸、不滿、抑壓、將た人生の重荷を忘れたいのだ。

自分のそばには、妻は病て居る。子供は泣て居る。食ふことを專念として、其以上に出ることを許されない勞働者の生活は、樂みでなくて、重荷である。人類としての重荷である。

彼等も、醉はずには居られないのだ。

道德に醉ふ人は幸ひなる哉。酒に醉ふ人は不幸なる哉。

併も誰か眞の幸、不幸を判するものぞ。

自分で自分をいましめの鎖

自分で自分の囚めの鎖を探して歩いて居るのが、吾等の毎日である。心配しなくもいゝことを、强ひて自ら造り上げて、彼れでもか、之れでもかと心配して見る。

少くも、事實以上に、人の心持ちを忖度したり、人の思考の上に、怒つたり、泣いたりして居る。

怒るのは、自分以上のものに、自分より力が大きいと思ふと怒つて見たくなる。

又力及ばぬとなると泣いて見たくなる。

實際以上に、現實以上に、自分の忖度や、揣摩や、邪惟や、想像から、何の位斯の世の中を暗いものにして居るか知れやしない。

吾等は決して、明日を思ひ煩つてはならない。今日の苦勞は今日の苦勞で在り餘つて居る。

取り越し苦勞果して何かある。何の役にも立たない。只事實以上に、斯の境界以上に、吾等の生活を暗くする許りである。精力を浪費する許りである。

自分で自分の、いましめの鎖は、自分の心持の上に在る。

吾等は須らく悲壯なる英雄的精神のもとに歸然として立つ力强さがなければならない。

悪人より、より以上だ

俺は死ぬ迄かう罪の生活を送る積りだ。罪惡は甘いものだからネ。皆が夫れを爲る癖に、罪惡の裡に生きて居る。唯外の奴は皆内密にする。俺は夫れを大つぴらにするばかりさ(ドストイエフスキイ)

これは「カラマソフ兄弟」の中の言葉だ。人間の暗黑を寫す彼れは、此の如き絶望の言葉を其兄から發せしめて居る。

彼れは、眞面目な女と結婚することが出來ないのだ。立派な心持に歸ることが出來ないのだ。

自分に、立派なもの、眞面目なものが見ないのでは無い。知つても居る。分つても居る。併し之れを追求することが出來ないのだ。進んで取ることが出來ないのだ。

取るだけの努力が無くなつて居るほど絶望して居るのだ。罪惡は甘いからネこ言つて居る。

一時は甘いかも知れない。併し最後は、ウント辛くなる。破滅の運命を必然的に伴ふ。夫れでも其の破滅を知りつゝ、正しき途を進むことが出來ないほど心が亡び去つて居るのだ。

神は、モー此人の上に居ない。「我れ神こ共に在り」こ云ふことが人間一番大きな強さであるけれども、夫れが在ることの出來ないほど絶望的になつて居るのだ。

皆デカタン氣分。酒を飲み過ぎた二日醉ひの氣分。人間此所に至れば惡をも爲し能はぬのである。惡人より於以上なのだ。何事をも爲し能はぬのである。

人間を之れだけに、すたれさすものは、酒こ遺傳だ。酒は後天、遺傳は先天。

先天は醫すべからず、恐るべきは、血だ。血は結婚だ。

家格に囚はれて居る結婚は悲慘だ。

血液よりは、家格を貴んだ過去は憐むべき哉である。日本は癩病國な譯である。

貴ぶべきものを貴ばず、貴ぶべからざるものを貴んで居る。

遺傳の爲め、惡をも爲し能はざる頽廢の血に至つては、吾等の慄然こしなければならない所である。

哀みより慰めに

哀むものは幸なり、其人は遂に神より慰めを得べければなり（山上の垂訓）

何うして、なぐさめを受けるの乎。只哀しんでばかり居ても、なぐさめを受けることが出來ない。

或は哀しむが爲に、傷るかも知れない。

哀しんで而して、傷らずこと孔子は言ふが、常識に富んだ孔子にして初めて出來ることで、常人の大部分は、哀しめば、多く傷るものである。

富んで而して、おごらないものはない。おごらないことが出來ないのだ。其の富ることの自然の誘惑は、如何ともすることが出來ないのだ。

恰度其樣に、哀しんで傷らないことは容易では無い。かなしむものは、多くかなしむことに囚はれて、如何ともすることが出來なくなる。

傷らずことは、囚はれないことだ。多くは囚はれる。

富に囚はれ、かなしみに囚はれ、遂に囚はれなければ止むことの出來ないのが人間だ。

然るに、かなしむものは幸也とは、何のことだ。

幸あるには、其囚はれから脱しなければならない。かなしみを乘超わなければならない。

哀しみを、踏臺にして、一層高きに登らなければならない。

哀しみを動機に、今迄知らなかつた別な世界を發見しなければならない。

乃ちなぐさめを得るは容易で無い。併し哀しんで傷らざるのみ乎(孔子)、更になぐさめに至らしめなければならない(ヤソ)。

孔子よりも、耶蘇は、遂に徹底して居る。

天下の春は已れ獨り

衰世道を行ひ難し、花時貧を稱せず。(李咸用)

誠に花時貧を稱せずである。八面の清風衣袂を吹くゝ天下の春は、盡く吾が春である。天下を擧げて吾れに背くも、吾れは別に花時貧を稱さない神仙の氣萬人に之

れあらんことを求める。

春風やこある垣根の赤草履。（一茶）

之れが春だ。春だ。春や至る所に濃艶なれ。決して吾が貧憂ふるに足らず、吾が名の知られざるを悲まず。天下の春は、吾れ一人の春である。

感受性は何の爲めぞ

感受性こ云ふものは、何の爲めに、吾等人間に、神が與へ給ふたの乎。

感じ受ける。人生の一切から、何物かを感じ受ける。

從つて感受性の鋭敏なことは、人間根本の賢愚を區別する所以に相違無い。

只餘りに、神經的に、餘りにヒステリー的に、感受性の一時的昂奮に富み一寸こ感ずるけれども、直に忘れて仕舞ふ。後は、そんな事が在つた乎こ、けろりこ仕て仕舞ふ。

之れでは感受性が、如何に鋭くても仕方が無い。

感ずる時には、火の點く樣に、身も世も無く感ずる。日本人の感受性、殊に聰明だなこ言はれる人の感受力は、多く此の種のものが少くない。

けれども、實際、感受力は、吸集力でなければならない。

數奇な生涯の一切の苦患から、何一つ吸集攝取することの出來ない馬の樣な人間之れも少くない。

人生の遭逢から、泣くにも、笑ふにも、病むにも、達者にも、うらみにも、そねみにも、常に其中から何物か、痛切には、神の何物かを吸集攝取するものでなくてはならない。之れが本當の感受性だ。

過敏な徒も、鈍感、馬の如き愚人も、齊しく、天の何物かを吸集攝取することの

出來ない點には、全く同一である。

賢の如くして實は愚なるもの、皆之れである。

吾等は、毎日、何物かを吸集攝取する所に、我が感受力を持つて居るのだ。此所に人間らしい立場が儼存して居るのだ。

徒に敏にして、併も一の吸集し能はざるもの、鈍感馬の如きこ何ぞ擇ばん。

力

皆人間の所造のみ

悪魔だつて、人間の作つたものだ。神だつて人間の作つたものだ。

人間の心の中に、悪魔の分子も、神の分子もあるのだ。

人間を離れては、神もあるこゝが出來ない。悪魔もあるこゝが出來ない。

神が人間を作つたかも知れない。併し神の作つた人間は、神其ものを其儘に知るこゝが出來ない。矢張り、自分の分る範圍に於て、神を知るに止まる以上は、神は人間の作つたものだ。

人間が自分に持つて居るものを、神こして表はしたのでなければ、神を知るこゝが出來ない。神は矢張り、人間が作り出したのだ。

神は何んな大きな力を持つて居ても、ユークリッドの幾何の方則に從つたのだ。人間の方則に從つて造つたに過ぎない。

人間の腹の中には、悪魔も居る。居り得る可能がある。神も居る。居り得る可能がある。

蓋し、其神も、魔も、人間自ら作り出したものに過ぎないからである。

人間自らの要求及内容を形像化したに過ぎないからである。

人間の作り出したものだ。开所に恐るべきものは無い。失望すべきものも無い。人間の爲すことだ。

只恐るべきは、魔も神も在る自分だ。自分ほど、恐るべきものは無い。自分の裡に、魔もあり、神もある。

嚴肅にして、恐るべきは、自分だ。悪魔でも無い。まして神でも無い。

乞食を仕ながら勝つた

世に勝つ乎、敗るかは、其心持である。世に敗て、怨んで泣いて居るのも、明かに自分の性格の表れである。

釋迦は、乞食をしながら、世に勝つて居た。

托鉢の坊主は、往來の人や、犬や、子供に迄石を投げられたり、小便をひりかけられるかも知れない。人の門邊に立つて、人の憐れみを受けて、一握の施米に、感謝のお經を讀んで行く。乞食坊主の生涯は、見る人に依つては、憐れな生活かも知れない。世に敗けた生活かも知れない。

併し釋迦は、之れで世に勝つて居た。乞食をしながら、かびら王城の王冠よりも、此乞食を貴しとした。

此所に人生の大きな價値を發見し、又自ら把持し、矜持した。誠に此所に誇りを

覺ねたのである。

开して今の坊主の誇りも此所に無ければならない。乞食を誇らなければならない明日の食無きことを誇らなければならない。方丈の室を誇らなければならない。方丈とは、方一丈の室である。方一丈あらば、以て、我が骸軀を容れて餘りある幾ら威張つても、六尺以上になることが出來ない。

君達は、何を求めて居るのだ。乞食をしても、能く世に勝つて居ることが出來るでは無い乎。

永遠中の一瞬

自分の魂、之れほど貴いものは無い。魂のうめき、之れをよそにすることは出來ない。

高いとか、低いとか、富むとか、貧とかは、足の下の泥の色の差位だ。足の下の泥が赤からうが、白からうが、闘したことでは無い。貧乏だつて、金持だつて、何れ程違ひがあるのだ。

永遠中の一瞬を惠まれたる自分。自分の魂、之れに背くことは出來ない。他人の鞭が、自分の魂の存在を傷ける場合は、斷じて許すことが出來ない。吾等は、飽迄自分の魂の本然に生きなければならない。

魂の本然の聲は、あらゆる他の一切のものに、替ふることが出來る。

最後は、自分の魂だ。自分の魂の許さないことは、如何なるにも許すことが出來ない。吾等は、自分の本來の魂に忠實でありたい。开所に權威を感じたい。

社會的境遇たる、地位、職業、貧富、貴賤は、以て自分の魂を損することが出來ない。

吾等は、最後迄、自分の魂に生きなければならない。自分の魂の本然に覺めなければならない。

切り開く爲の野倒死に

現實、此現實ほど冷酷な、眞ッ黑な、無慈悲なものは無いかも知れない。

恰度荒野の眞ン中に只獨り仁王立になりつゝ何か光明ある一地點迄切り開いて行かなければならない樣なものだ。

此切り開きが、人間の創造である。

冷酷な、眞ッ黑な現實は、決して、此切り開きを容易にして呉れない。寧ろ困難にするかも知れない。

つめたい彼れは、青年の血の湧けば、湧くほどつめたく、冷然こし彼れに向つて行く。

切り開くことは、創造することだ。自分で自分を創造することだ。

夫れを、親の財產を只貰つたり、自分の人格から浸み出させない所有に晏然たるものは、切り開かなくも可い。睡つて居れば可い。

馬鹿で無い限り出來る譯である。けれども、自分を、此現實の境に、新に切り開いて行くことは、容易なことでは無い。

從つて創業の才には、絶大な人格がある。成効したものに何等か大きな價値を發見するのは之が爲めである。

只我れ進まんかな。野倒れ死も又興だ。

嚴肅なる責任觀念の上に立つならば、吾々は、實際、不幸の種、自分が不幸になつても仕方の無い種を、餘りに多く撒き過ぎて居る。

自分の撒いた不幸の種が、盡く芽生して、自分の一切の上に、覿面に報つて來るならば、人間は一人も生きて居る資格があるまい。

本當に、自由と責任の上に、自分を考ふるならば、先づ自分の身體さへ、能く、こはれないで、たつしやに生きて行かれると思ふ。

隨分不養生なことをするに相違無い、知りつゝ、やつて居る。之が覿面に、自分に報つて來たら、一も二も無いであらう。

神樣は、善く許して呉れるものだ。

お互は、隨分、不幸の種を毎日〳〵まき散らして居る。

夫れが、いよ〳〵本當にたまつて、自分に報ひて來る時には、泣き面をして天を怨む。

人間の大部分の不幸は、自分の種なるが多い。

せめて、自分の撒く種だけは、出來るだけ減じて行きたい。

自分が一切處だ

一切の空間と、一切の時間と、一切の物と心とを一所に集めたものが自分だ。

自分が一切なのだ。自分を措いて何物も無い。

何んなに宇宙が廣くても、何んなに天地が大きくても、其生命と鍵とは、悉けて永遠を刹那に生活する自分に集まつて居る。

自分が天地なのだ。自分が宇宙なのだ。自分が一切處なのだ。

從つて自分の態度から改めて行かなければならない。自分が泣けば、一切が泣く

自分が呵々大笑すれば、萬象皆笑ふ。

あらゆるものよ、皆我に來れ。何んな危險に處しても、何んな墮落に當つても、自分の態度で、地獄も極樂になり、極樂も地獄になる。

永久が刹那に、無窮が現身に、皆凝り集められて居る。自分は、此永遠的の刹那に、無窮的現身に、最大の敬意と自重を持たなければならない。持つて开所に總ての鍵を授見しなければならない。

貴きかな、我れ。

大風起つて雲飛揚す

「よし、やれ、おれもやる、おれは學問は無い人間じやが、その代り商買の方で博士になつてやる」（これから）

之れが生存の權威だ。學問などは、左程に必要なものでは無い。殊に今の實學の如きは、全く職業中心となつて居る。職業は生存の權威では無い。

生存の權威は「我れにあらずんば爲し能はぬもの」を把持して初めて、我れの存在を高く肯定することが出來るのである。

學問は無くても、商買の方で博士以上なる自信を持つて居て初めて、自らの滿足がある。自ら存する所以の力も感ずる。

此の力の感が生存の快味だ。

博士と云ふ表面の形式の如きは少しも關せず。博士以上の實力を、客觀的に把握して居る自意識は以て、我れを滿足するに餘りある。

大風起つて雲飛揚すの感も之れだ。

只已惚れではいけない。客觀的に自ら價値して居なければならない。

自意識に、普遍妥當性がなれけばならない。

人生の三樣の態度

部屋の中の電燈が消えた。黑暗〳〵だ。此時君達は何うする乎。此態度に三樣ある。

一、あゝ燈火が消えた。仕方が無い。靜かに夢の迷宮にでも入らう乎。即ち眠つて仕舞はふ乎。此儘、あかりの點く迄。

第二の態度は、否、否、外は此暴風雨だ。勿論今度は點くまい。一時も早くマッチを見附けて、ローソクでもともそう。併し其マッチが何所にある。火種は容易に見附かるまい。困つたナゝ、手を拱いて只考へて居る。新しい火種を求むるに急であるけれども、部屋の黑暗々なのに恐れて、何うにも仕樣が無いゝ、只じつとして

暮る。

第一の態度と異なる所は、只前者が眠らうとするのに、第二のものが新なる火種を求め樣とする其求めの心の有る、只夫れだけである。

併も第一、第二共に、新たなゝ火種を得る準備には、共に一歩をも實現上に近づけて居ない。

第一のものは、なまけ者の、進んで取ることを知らないあきらめの徒、無爲の徒、封建思想の徒。之れが却々に多い。

第二は、近代的の心持と要求を多少心に持ちながら、其求めに背いて、眠ると同じ結果を追つて居るに過ぎない。

加ふるに、第二のものには利害性が伴つて、开所らへ、あたまでも、ぶッけてはつまらない、マアゆつくり位な態度となる。理想を實現する情熱の足らないものだ

第三本當の近代人は此の場合如何にする乎。

電燈の火が消えた。第一、第二の人々は、眠つて居る樣なものだ。火の消えた儘運命の儘にして置く。

けれども、之れでは、何うしても滿足することが出來ない。殊に近代人はこんな簡單な、消極的な態度に滿足出來るものでは無い。何とか解決しなければならない

夫れは、第三の態度である。運命のまに〳〵に流されずに(一)。又何とか仕樣とばかり思つてのみ居ず(二)。今は前後を考へず前進する時となる(三)。

何は兎もあれ前進する。光を求めて、飽迄前進する。電燈の光りが消えたら、あたまを、开所らの戸棚や、柱にぶつつけても構はず是非マッチを搜しにかゝる。

光を求めて前進する。何は兎もあれ前進する。其結果は暗であつても構はない。光りであらうが、暗であらうが。

力と命は、眞と僞のあなたに横はつて居る。

間違つたら暗かも知れない。場合に依つたら暗益々暗かも知れない。僞益々僞かも知れない。

けれども結果を恐れて、あきらめて(一)、思案して(二)、居る時では無い。

斯うして初めて、本當の光(よし暗でも)と命とを我れに持ち來すことが出來るのだ。夫れが死であつても仕方が無い。

職業上の英雄的精神

自分の職業の上に、英雄的精神、英雄の樣な、悲壯な、痛快な、豪爽な、眞率な殊に最も勇ましく、力强き心持ちを以て、自分の職業に對して見たい。夫れが英雄的精神だ。

英雄の心持、眞の英雄が持つた樣な心持ちに於て、自他に對する、目前の人事に對する。之れが出來なければならない。

互に之れをやつて行きたい。

びく〳〵しないで、へこ〳〵しないで、昂然として、天を仰ぎ、胸を張つて、人生の苦闘に對して行く。

夫れには、先づ勇氣を必要とする。勇氣、昔の英雄の樣に死をも辭せざる覺悟を日常の仕事の上に、眞劍に持つ。

之れが、今の日常生活の上に缺けて居る。

即ち眞劍が欠けて居るのだ。職業に對する眞劍の態度が缺けて居るのだ。

眞劍になつて居さへすれば、決して目前を恐れることが無い。誰にも恐るゝことが無い。

吾等から恐れさへ奪れば、百物皆通ずである。开して英雄的精神を發揮することが出來る。否英雄的精神は、之等の恐れを自我の力に依つて、全く拂拭し去るのである。拂拭し去るには先づ我の職業に對する態度が、眞劍である事を前提とする。

眞劍、眞劍、眞劍の前には、必ず英雄的緊張を伴ふ。

之れが、平生の職業の上に無ければならない。職業と英雄的精神。之れでなければならない。

嚴肅なる喜び

自己の苦痛で、自己の歡びを鍛へあげる。

苦痛を知らなければ喜びの在る譯が無い。

夫れを苦痛を避けて獨り喜びのみを執らうとするから、吾等の心理に矛盾を生む。

苦痛あつての喜びである。

苦痛と喜びとは同じものだ。

紙の兩面だ。其一面のみを執るを得ない。

兩面を執る所に人生がある。

即ち自分の苦痛で、自分の喜びを鍛へあげる。

苦痛を經たる後でなければ喜びが分らない。

病氣をしなければ健康の喜びが分らない。

人生生活其ものゝ内に隱れて居る嚴肅なる喜びを知ることが人生だ。

苦痛を受けて初めて、嚴肅なる喜びに陶醉することが出來る。

金持には金の値打が分らない。

況んや成金をや。

況んや　嚴肅なる喜びをや。

浮　き　つ　沈　み　つ

人ともなれず、獸ともなれぬ立場。餘りに不徹底では無い乎。獸となつては大變だが、浮びにあらず、沈むにもあらぬ人獸の間をさまよふ位ならば、一層、ドン底に落て、獸となつて、其底から、浮上がる力を發見したい。

中途半端が一番罪だ。上ることが出來ず、下ることも出來ない。

人間は、神と獸の中間に生息すと云ふが、神となれない迄も、せめて人となりたい。

耶蘇や、孔子になれなくも、せめて人となりたい。泣いたり、笑つたり、そねんだり、怨んだりする内に、全く獸にあらざる特色を持つ「人」之れだけでよろしい。到底神格を髣髴する釋迦、マホメットの如くならずとも。

心持ちが既に此所にあるならば、總てのことに、何所にか徹底したものがなければならない。

學者にあらず、政治家にあらず、更には、此事を成すにあらず、彼の事に專らなるにあらず、何れにも徹せざる結果、遂に何れにも成功せざるもの、獨り個人のみでは無い。國家の政治にも之がある。

此所に主義、政見の無い譯である。一主義に徹すれば、他主義との磨擦を生んで本當の主義的區別を見るけれども、日本の政黨政派上に、政見の根本的差別を示さないなども明かに政治に徹底的な立場がないからである。

個我に徹せよ。一事に成れ、賢も、愚も。

殺人劍を活人刀に

殺人劍乎、活人刀乎と云ふ。或者には殺人劍となる。或者には同一なものを活人刀とする。同一な劍なのだ。一方は殺し、一方は活かす。

劍には別が無い。之れを受けるものゝ態度に依つて、或は殺され或は活かす。

劍は一ふりの劍に過ぎない。或は殺し、或は活かす。

之が我れの態度である。我れの態度に依つて、其何れともなるのである。

人生毎日の遭逢に對し、之れに殺される乎、之れに生かされる乎、之れに依つて益々進化する乎、將た益々退化する乎。此所に殺人劍、活人刀がある。

馬から落ちて脚を折つたのは怪我であつた。併し秦王の徵發を免れて故鄉に歸り得たのは彼れを生かしたのだ。幸が幸で無く、禍が禍で無い所にあざなふ繩の諺があるとは、支那の有名な諺だ。

併し之れは偶然だ。偶然にあざなふ縄となつたのみだが、吾れから進んで、禍を變じて幸福と爲すものがなければならない。吾れから求めて、殺人刀を活人劍に變らしむる力がなければならない。

男子の一番貴ぶべきは、此力だ。禍を禍に終らしめない轉回の機會を掴み得るものにして初めて男子たることが出來る。

賊我れを襲ふ。先づ賊馬を奪ふのみならず、其賊馬に依つて、逃るゝ賊徒を追ふ機先がなければならない。有名な賊馬に騎するものだ。

此所に禍は變じて幸となるのでなく、禍を變じて幸とする力を見る。殺人の劍は活人の刀たるのでなく、活人の力と爲すのである。

人と人の接觸の興味

人や、人の集まりの世間と戰ふ乎、農業の樣な、土地や、果物と戰ふ乎。何ちらが面白い乎。

何ちらも面白いが、面白いと面白く無いとは、其人の稟性と境遇に依り、人と戰ふことを興味とするものもあるし、自然を可とするものもある。

併し農業は、總てが自然を中心とする。

日本が農業立國だなんて言ふて、國民の最大多數を農業に發見した職業的關係は人と戰ふに於て、甚だ下手であり、甚だ拙劣であり、甚だ臆病なものと仕た。

國としては、外交が極めて我國民の缺點である如く、個人としても、他人に對する表情及び交際に拙劣を極むるのが、日本農業國民の今迄の運命であつた。

人が人に對する術、及び心持が數層進歩されねばならない。不幸にして之れが缺けて居る。

市街地などが、多少此機會があつても、夫れは虚偽となり、輕浮となり、詐術となり、欺瞞とすらもなつて居る。

殊に都會地の女に至つては全部虚偽を以て生活して居るとも言ひ得て、彼女等の人の人に對する關係は、所謂お世辭なる――腹にも無い出鱈目――の上手なのが、并しておしやべりなのが、交際家とされて居る。

交際家も、こんな浮薄な、いやな、下等な表れであつては仕方が無い。

人が人に對する征服、又は接觸の興味、之がもつと〳〵眞面目に研究され、眞面目に考量されねばならない時代である。

本當の社會問題

人間が、一週間や、十日、何ものを喰はなくも、決して死ぬことは無い。

封建時代にしば〳〵起つた凶年に、なぜ、餓死途に横つたかと云ふに、單に喰ふ米が無いからでは無い。

何か喰つて居る。左樣餓に死ぬものでは無いけれども、如何せん、人を根本的に殺すものが、外にあつた。

夫れは、精神である。身体の死ぬ前に、からだの飢る前に、モー精神が死んで居る夫は何の爲め乎。

曰く恐怖、不安、慘痛、失望の爲だ。

之から先、何うなることか乎、母も、子も死んだ。此の自分が何うなる。モー生てる効が無い。恐怖と失望と一どきに來る。

即ち心から先づ死んで行く。

恐怖と不安の爲め、如何ともすることが出來ないのだ。

凶年に死ぬ大部分は、此精神的死から來て居る。

人間に死を與ふるものは、其不安、恐怖、絶望である。

之れほど不幸なことは無い。

生活の不安、恐怖之ほど人間を脅威して居るものは無い。

脅威其ものは、左程で無くも、受けるものは、痛く神經を刺戟される。

若し今の世界に、此生活の不安が甚だしいとすれば、幾多の問題を孕み來る事當然では無い乎。

併も其の問題は、本當に人間に追ひ迫つた血の出る問題である。之れを稱して社會問題と云ふならば、社會問題は、決して、簡單な、弱きものゝ泣く音では無い。

心あるものは、之れを等閑視することが出來ない。

若し之れを閑却するものもあらば、自ら卑怯であるか、又は聾啞の徒である。

卑怯なるものは、其の聲の漸く悲壯なのに驚いて、寧ろ之れから耳をそむけ樣とする。

鈴を盗みながら、其の音のはげしいのに、自らの耳を塞いで、僅かに心を安うする愚人に過ぎない。

若し夫れ、此聲に耳傾くることを知らないならば、夫れは本當の色盲だ。あたまの無いものだ。聽いても聽くことの出來ない者だ。

こんな人々に依つては、目前に死んで見せなければ死は分らず、自分の身がぶつたたかれなければ、痛いと云ふことが分らない。

不安、恐怖、焦燥。自分の生活に對する脅威、壓迫、動搖は、近代人の神經を極度に尖らした。

今代人は、如何にかして此不安から脱出したい爲めに、今のごよめきとなつたの

だ。今の社會的要求となつたのだ。

決して單なる言論では無い、本當の要求である。血の出る要求である。

何んな境遇でも

人間は、何んな境遇にも生きて行かれるものだ。開所に人間の發達があり、優越性があり、神性がある。

往くさして可ならざる無しこは、才器縱横な有樣を現はしたのだが、一たびドン底の精核に觸れて居るならば、自由自在なることが出來る。活潑々地なることが出來る。

極北の寒地、半年暗く、半年明かるく、魚獸の油許りに生活して居る人間の氷の國があるかと思へば、燒く樣な赤道の下にも、最も多く躍つて居る人間がある。

何んな切ない、悲しい境遇でも、ジツトこらへれば堪へられないことは無い。思ひ樣である。

多くは、自分が自分の主觀の爲めに、あやまられ、若くは誇大にされて、居ても立つても居られなくなるのだ。

吾等は「在るが儘の姿」を見ることが出來なくて、「我が見たる儘の姿」以上に出づることの出來ない智識論上の約束に立つ以上、悲しみも、苦しみも、皆自分の主觀の立場に、其最も多くの色彩を有する。

昔の土牢の中にさへ、十年、二十年をもぐらの如く生活したものもある。

ローマのキャタコンブは基督教徒を、地下に追ひ込んで、地の底で無れけば、斬禱も、說敎も、殊に、墓場を建てることすら出來なからしめた。

夫れでも生きて行つた。開して遂に、基督敎はローマを征服した。

吾等は到る所に吾が最善を爲さなければならない。

眞の體感に達せよ

あたまに消化した乎、しない乎は容易に分らない、何度も繰返して考へて見て初めて自覺する。

食物の消化の有無は、直ぐに分る。反應が一々自覺症狀となつて表れるから。併し思想や概念の夫れに至つては全然知ること容易ならずである。

消化された時にのみ、其智識が力となるが、消化の爲めには、宗教方面が一番努力を仕し居る。

法華經は、眼で讀むこと、口で唱ふること、誦したものを耳に聽くこと、开して手に書くこと、即ち手寫すること、此四つを要求して居る。

日蓮なきは、之れを何回行つたか知れたものでは無い。

眼だけでは駄目だ。眼から入れただけでは、本當に、あたまで消化されて居る乎何う乎分らない。

更に口で唱ふると同時に、其唱へた聲を耳へ持つて行く。猶足らずに、手で其一々の文字を寫す。

斯うして飽く迄消化を要求した。此所に至れば、滋味誠に盡きないものがあらう

之れ迄消化を外面から强ゆれば、いやでも我物になる。

宗教上には此「我物」になることを一番大事なことゝする。自分の手の中へ入れて即ち體感、體驗して初めて我物となる。

毎日題目、念佛を唱ふれば唱ふほど、毎日新しい意味と消化の度を增して行く所に本當の體感がある。吾等にも此用意がなくてはならない。

我れは人なり

基督は「吾れは神の子也」と体感した時に、彼れに絶大な力が出た。ソクラテスもデルフホイの神塔に、神の默示を得たりと体驗した時に、彼れの生涯の事業が開始された。

マホメットも、ボーロも皆左樣だ。孔子に至つては「天斯の文を吾れに濟せり、天必ず吾れを生かさん」と言つて居る。此所迄來なければ力が無い。陳蔡の野に餓ゑても、桓魋に殺されんとしても、安心立命なることを得たのは之れが爲めだ。

吾等、神の子たる天の默示を受け得ない總ての人は此所に及ぶことは出來ない。自ら信ぜよとは、ニイチエも高唱して居るが、自ら信ずることすら偉大なる人物にして初めて爲し得る。

自ら信ずることは容易で無い。況んや神の子なりとするをや。況んや上行菩薩の權化(日蓮)なりとするをや。

併も吾等は次の事だけは眞に、眞に心の底から信じたい。

吾れは人也

せめて人としての尊嚴だけでも持ちたい。人格的價値の權威を充分に体感して、如何なるにも「吾れは人なり」と云ふ自信、此自信の前には、あらゆる罪惡が盡く消ゑ去るであらう。其自信を有したい。

誘惑も、困難も、貧も、病も、富も、權も、吾れは人なりと體得する場合、陽光の前の氷となる。吾れは人なり、之れだ。

火を地上に點ぜよ

山上に灰を運ぶものになる乎、地上に火を來すものになる乎。

山に隱れて、世の中を厭つて、左樣で無くも、早く樂隱居をして、世の中から遁

れ去る態度の古い人々は灰を山上に運ぶものに過ぎない。

燃え切つた灰が何にならう。活力の無い灰。血の無い灰。熱の無い灰。此灰の樣な徒が少く無い。

彼等は、何の役にも立たない灰に過ぎない。少しばかり金を貯めたこと言つて活動を止めたり、少し地位を高めたからつて自ら慢す。彼等は灰だ。

吾等は、何時でも、山上に立たず、谿谷に入らず、常に火を地上に點ずるものでなければならない。

火は如何なる場合にも吾等の世界にあらねばならないもの。

世界の發明の内、火の發明ほど絶大なものは無い。蓋し火食を知つて初めて人類の今の進歩があつた。

火の洗禮ほど絶大なものは無い。吾等は、此火を、飽く迄地上に點ずるものでならねばならない。火には必ず熱がある。輝きがある。

火を山上に運ぶ者よ。再び其内に火を包め。

古く、老ひさらばいたるものよ。せめては、若き血潮の火を育みて、其灰の内に包め。包むだけの役にも立て。さなくば滅びよ。

十八歳と三十一歳

唐の大宗は十八歳にして義兵を擧げ、父を助けて漢人再興の大旆を揮つた。項羽の天下を執つて併も之れを失つたのは、彼れ正に三十一。

此の若さだから、虞や虞やのおのろけを言つても頗る面白い。馬は進まない。酒は無いし四面は楚歌だ、虞美人と分れて、血の涙を出さなければならないが、开所に詩があつた。

併も其詩は、全く青春の血の燃え上つたものであつた。日本で、能く三十一にして天下を執つたものが幾人在る乎。如何に兵馬、英雄雲の如き間こ雖も。

そして、彼れは、烏江の亭長の頻りに江東の王たらんことを奬めるに拘はらず、八千の子弟今一人の歸るもの無し、吾れ何の面目あつて鄉黨の父兄に見えんやこ爲して、自ら刎ねたなごは、全く、詩中の詩。

支那には珍らしい氣持の宜い英雄、夫れも實に三十一であつた。

十八にして義兵を擧げた唐の大宗は、古今に絶した大傑物。夫れが十八で、モー義兵を擧げて居る。青年よ、考へよ。

女

あこがれの　國

妖精よ。興無き(退屈な)此家から妾を連れ出してお呉れ。
妾の無くした總ての(嫁入り前の)自由を返してお呉れ。
妾は働きたい時に働いて、なまけたい時になまけたい。
妖精よ、さあ來て、わたしを此のつまらない世界から連れ出せ。
开して
お前こ一所に風にも乘らう。
亂れた潮の波頭をも走らう。
焰の樣に(自由に)山のてつぺんに舞ひ踊らう(エーッ)

こんな自由な心持ち、或は危險さか、放縱さか言はれる心持ちが今の女子供に、多少でも見るこさが出來るだらう乎。

以上は、エーッの有名な「あこがれの國」の詩の一片である。

人は自由を求めて止まない、お嫁に行つてから、其單調な家庭が、いやで〳〵たまらない。何さかして、人間さしての本然の叫び、自分自身の要求に目ざめて、之れを實現して見たい。

なまはんか、結婚した今の身が、なさけない。

あゝ、妖精よ、姿を此退屈な、下らない世の中から連れ出して呉れ。斯う云ふ人間性の叫び。

之れを單に、吾儘な女の叫びさのみ見る乎。

之れが幾分でも日本の女に分る樣にならなければ、日本の家族制度は進歩せない

白百合の樣な女性

白百合のやうな姿、然んな姿に會ひ度い。白百合、何さ云ふ氣高い花であらう。女に若し此氣高さがあつたさすれば、それは獨り形の上から來るのではなくて、心から來るのである。

心の現れが、百合のやうに氣高くて、始めて其處に人を惹き附ける貴さがある。牡丹でもない、櫻でもない、勿論梅でもない、あゝ白百合、白百合のやうな姿が今の日本の無智な女に求める事が出來るであらう乎。

舊女性の飽和に、近世理智の洗練を經過せしめて、始めて白百合に近い貴旅的臭氣を脱した貴さを其表象に見る事が出來やう。

あの人の子ならば

女が、本當に、此人の子なら持つて見たいさ云ふ心持。この親ならば、如何にも

立派な、將來ある、親らしい誇りある子の血液たることが出來ると思ふ樣な男。

こんな男を、戀の對照として行くべく神は、性慾を授けたのであるけれども、原始的な儘に敬遠主義を執られた男女關係は、少しも新しい進化の洗錬を經て居ない

女が、最も自分に異つた性格、異つた體質の異性を戀ふる傾向のあるのも、之が爲めである。

女が、自分の將來の小さな慾望、即ち、安全に生て行かれる立場、夫れも科學で無くて單純に「親切」な男と云つた樣な中心に、異性を求めて居る有樣は、如何にも氣の毒なほど憐れなものだ。

なぜ、女は、產まんとする求めの中心本能に目覺めて、あの血液(男)の子ならば——と思ふに至らないのだ。

之れ迄に、其の本能が、智識化されなければならない。之が感情の進步である。

お前の思ふ儘に

イプセンの「海の夫人」は亭主から自由に！お前の思ふ儘に選め！と言はれた爲に泣はれた。

人の自由意志ほど貴むべきものは無い。人の自由、其人の思ふ通りに、責任を以て撰擇する場合には、二つの心も、三つの身體も、本當に一所になることが出來る心は先方に、身體は此方にでは、何時迄經つても、一致が生れない。夫婦にも、家庭にも、友情にも。

責任に於て、自由意志の撰擇を、夫れ自らにさせる所に、人間らしい道德上の立場がある。神らしい權威がある。

極めて自由なるが故に、極めて責任あることが出來る。結婚が。

ねゝ貴方、お互に自分を欺いて僞つて居るは無駄な事です、貴方は妾をお買

ひになるし、妾は又、この身體を貴方にお賣り申した。もこ〳〵、何んな貧乏をしても、何んな仕事をしても、私の意志でもつて私の心から、してやつて行かなければならなかつた。

ね貴方、貴方は親切にして下さいましたが只口惜しいことには

妾が自分の心から

此家へ上ら(嫁入)なかつた事です。こ。

こんなお嫁に、夫婦も、同體も成り立つものでは無い。

私は、眞から、自分の自由意志に依つて、貴方こ夫婦こなつたのでは無かつたのです。こ云ふのだ。

實際、こんな夫婦が、幾らでも在る。

貴方が妾を此地へ止めて置かうこ思ひなさるならば（夫の權利こして强制するならば

の意）そうなさいまし。貴方には其權利がおありですから。けれども、妾の心こか、考へこか、一切の妾の望みこ、願ひこは、繫ぎ止めることは出來ません。妾は其の爲に生れついたのです。何うか自分を自由にさして下さい。妾を充分自由にさせて下さい。撰擇の自由の無いことは、妾には堪へられません。

サ、自由にさせて下さらなければいけません。あらゆる絆を斷つて下さいまし、今こそお互の心から、お別れする時でございます。

海の婦人は、此心の自由を要求して、自分に撰擇の無礙を得た。責任を持つて、自由に自らの立場に於て、彼れか、是れかを決し樣こした。

全く人の身體は、しばるこ、が出來る。其舌を引拔くこも出來る。けれども、望みこ、願ひこ、心持ちこを奪ふこは出來ない。

海の夫人は、自分の本當の責任の上に立つて、自由撰擇を夫からで無く、親から

で無く、自分自身に於て、行はんとして遂に本當の自分に目ざめた。

「夫は其自由を彼女に與へた」

けれども、自分の自由の目ざめに於て、今度は、生れ更はつた意味に於て現在の夫を棄て去ることが出來なくなつた、此所に本當の自覺が生れた。

一つの大きな苦痛、矛盾、衝突は、彼女を生かした。

海の夫人は遂に

モ、妾は、貴方のものですわ、妾は自由に、責任をもつて、貴方のものに、なれました。

此所に、本當の夫婦が出來上つた。

總てが此心持で進まなければならない。

女は「彼れ欲す」である

ニイチエは言つて居る。

男の幸福は「我れ欲す」である。女の幸福は「彼れ欲す」である。

夫れは左樣だ。男は我れ欲す。我れ意欲すと云ふ。此力を飽迄高張して行く所に男らしい力も、美しさも出て居るが、女は、我れ欲すでは通らない。

女は、人の爲めに容づくらなければならない。男の愛を惠みの露に、漸く咲き出づる憐れな人の野原の小さな菫に過ぎない。

殊に東洋に於て左樣だ。甚だしきは、女の人格の尊嚴を認めずに、全く男の「我れ欲す」の對照物とするに過ぎない。即ち物とするに過ぎない。

我れ欲す。故に我れ能ふ。斯う云ふ人間の力の自由と主張とは、誤解する所に、甚だしい弊害を生むけれども、人格の權威は、此所迄到らなければならない。

女の幸福が、男の愛を經て初めて花咲くものとするならば、女は、始めから獨立した人格を持つて居ないものである。

女の幸福は、自分の人格の結果でなければならない。女も亦「我欲す」るものであらねばならない。

凶鳥すら戀の對照

烏が泣いた。凶鳥として居る。病人や、病人を持つて居るものは、氣持ちを惡くする。

隣家に、若い夫婦が、新婚の夢圓かに、甘い、嬉しい戀の味を味はつて居る。女の聲は殊に浮き〳〵して居た。

女は戀を獲て、初めて歌ふ、こゝ、恰度春に合ふた鶯の樣だ。

女は戀にのみ、初めて、世の中に觸れる。戀以外には、彼れに世の中を味はしめるものが無い。

併し、彼女等は、戀の爲めに、地獄の底に落ちて行く。人間の地獄に。开して戀に依つて、歌つた其心持を、現實の世に出ると共に、しうと、しうとめ、親類緣者の關係から全くぶちこはされるのであるが、夫れ迄は、頻に歌つて居る。

戀に依つてのみ知つた此世界は、最早戀に依つて元の通りになる事を許さない。

戀は、決して甘いばかりでは無い。

さはあれ、味はつて居られる間は仕合せである。烏が鳴いた時、彼の女は言つた

烏鳴きでも知れさうなものよ。

烏鳴きを戀にして仕舞つた。凶鳥すら戀の對象だ。

此世界に住んで居られる内が花だと思つた。

廣い價値と容貌

顔かたちにのみ生きて居る女は憐れなものだ。顔かたちが彼等の一切なのだ。夫れが運命の一切なのだ。

マホメットすらも、女を說くに

お前達が善事を爲せば醜い女も、美しいものとなり、年を經つた女も、妙齢となつて、皆極樂に行くことが出來る。と

斯う言つて居る。慥に極樂に行くことが出來るばかりで無く、先づ其第一要件として、美しい若い女になると云ふことを以てした。

極樂は、若い、美しい女になることが、何より大事なのだ。

之れまで、女の生命を支配して居るものが容貌である。

女が、容貌を生命とすること古今東西一徹である。

其容貌を養ふことも、慥に人生の一つの表はれに相違無い。徒に之れを愚にしてならない。

只容貌を以て唯一の價値とする所に過誤が生ずる。

容貌以外にも、幾らも、價値があるから、之れだけを、唯だ一つの價値とする所に大きな間違を惹き起す。

價値觀念は、廣くなければならない。狹い價値に罪惡と暗愚があつて、廣い價値に道德と智識を見る。

小說や芝居と苦痛

あぶない話しだ。單純に一つだけの世界しか持つて居ないことは。今の女の一番氣の毒な點だ。

戀以外に、澤山な世界があつて、其世界は、皆神の榮光を爲すものであることを知らないで居る。

從つて彼等には、戀以外の彈力が無い。

今の女性には、最も多く彈力が養はれなければならない。

戀の世界以外、ノラの人形の世界以外、何か特殊に、自分の持つて居る世界、他の何人も有することの出來ない世界、之れがお互に無ければならない。

女としては勿論、自分として、夫以外に、子供以外に、別な生存の世界がなければならない。

之れが女としての人の生存の權威だ。

一切を戀から離れて解することの出來ない今の人形以下な日本の女は、何こか目覺めなければならない。

男は少くも、彼女を目ざめさせてやらなければならない。

恐らく、最も女の入り易い文學の世界、感情移入の世界、美の世界の如きは、彼等をして先づ戀以外の世界に入らしむべく最初のものであらう。

文學をも、單に文學を樂みとするのでなく、狹い自分の涙の對象するのでなく、之れを以て他の世界を自分の世界として經驗する深酷なる努力の目的とする樣にしなければならない。

此點に於て小說や、芝居は樂みで無くて、一種の苦痛かも知れない。併し此苦痛を好んで經驗することを樂む迄に、他の世界を試むる境地に進め。

女は、幸運を幸運とせず、一番、不運に泣くものである。开して已れは、何んな

悪いことを仕たのである乎。こ只自分の運命を呪ふばかりである。

蓋し女は、一般に感受性に鋭敏なのと、男性の様に、我れ自らに、自由な運命を切開く境遇と、力量とを持つて居ない爲めに、殊に左様なるのである。

舊約のヨブは、殆ど絶望と共に神をうらむに近かつた。

併し幸にして、神の聲を聞いた。夫れは悲哀の極、絶望の極、遂に神を見たのである。神を見る神秘の境に迄自分の生命を突き込んで行つたからである。

我れ汝(神)の事を耳にて聞き居たりしが、今は眼もて汝を見たてまつる。是れを以て、我れ自ら恨み、塵灰の中にて悔ゆ。

眼もて、直接神を見たる見神の境に入つたヨブは、自ら神の意匠の絶大なのに驚いて、神の力の全能なのを、今更に聽き且つ見、此所に彼れ自らの小さな悲しみと目前の苦しみとが皆大きな神の意匠に成ることを知り、全く「人間的無智」を本富に體感して、救ひに入つた。

彼れは此所に救はれたのである。

此救濟の何の位の價値あるかは別問題である。此宇宙的解釋と、見神的實驗に依つて救濟されるものは幸である。

見神的實驗、之れだけでも苦痛に依つて人間に體感されるならば、大きな解脱の原因となることが出來る。

女の涙は虚偽だ

ドストイエスキイは、女の涙は信ずべからずと言つて居る。

女の涙はご信ずるに足らないものは無い。今は今、後は後、全く反射的に出て來るのだ。

氣まぐれに出て來るのだ。

くしやみをしても出るのだ。开んな涙に眞實がある譯が無い。

自分自身は偽らない積りでも、矢張り自ら欺いて居る。何ごなれば、昨日の涙ご今日の涙ご違つて居るから。

甚だしきは、一時間前の涙ご一時間後ごすら相反する涙を以てする。夫れにも、自分の矛盾を感じないほご、夫れほご不統一な精神狀態なのだ。

彼女等は、感情に懸けては全く反射的である。まして偽らんごするをや。

自ら偽り、自ら欺くご云ふ自覺すらも無い。

夫れは其時、其時ごして居る。當座の發作だ。發作の連續が人生なのだ。

理智の洗錬の無い女に於て殊に左樣だ。

蛙の腦髓でも、取り出して刺戟すれば反射する。女の反射は开んなものだ。ご罵るものがある。

女ごは惡魔

女は、近づければ忸れ、遠ざくれば泣くご云ふが、全く無理解な彼等ほご御し難いものは無い。

一切の形式を脱して、簡單に其對境及關係を處理してやれば、直ぐにつけ上つて他の權威をも、存在をも撥無した樣な、やり方をする。

さらばご言つて、全く遠く離して仕舞へば、根本の理解を持つて居ない結果、徒らに事理の齟齬を來すに過ぎない。

後家婆さんの心理は此所にある。惡魔の形が古來年老いた皺だらけな婆さんで形容されて居るごは、明かに此邊の消息を語り得て餘りある。

彼等は物質の怪物である。

ゲーテのファウストの中にあるメフィストフェレースと云ふ理智の怪物は、明かに男だ。併もファウストを地上の誘惑に如何ともすべからず、全く物の囚はれと爲さしめたものは女の惡魔だ。猿を相手として魔藥を作つて居た惡婆だ。

マクベスを、だまして、王權の位を奪はふとせしめたのも惡婆で、之れを助けたのは其妻だ。

女は物質以外に眼が無い。彼等は全く空間的存在物。時間や、精神や、理智やには盲目。恰度今の世間の代表で、象徴で、縮圖だ。

女と云ふ物的な動物が無ければモ少し世間は、時間的に分つたかも知れない。

女の世界は狹い、暗い牢屋の樣なものだ。時間と云ふ生きた流れの脈々としたものを知らずに居る。併もこんな男が世間の九分である。

劇を見る資格がある乎

芝居なども、本當に觀たいと云ふ慾求にならないものが見たつて何にもならない日本の女子供、眞實女子供だ。女と云ふ子供だ。子供以上には思はれないが之等の子供連中が、古くて、むせ返るかび臭い歌舞伎劇などを、妙に見たがるのは、本當に滑稽である。

女も、子供も、本能的なもので、本能以外に何物も分らないから、美しいものを觀たいと云ふのだらうけれども、斯んな慰みに、芝居を見て何になる乎。

劇と云ふ立派な綜合藝術は、斯んな單純な、女や、子供の本能のおもちやでは無い。

眞實人生の葛藤に堪へ難い思ひをして、せめて、藝術の極樂境に、暫時の無我を味はひたいと思へばこそ、斯所に大きな價値を發見するのである。

自分、及自分の苦闘を、まざ〳〵所に、劇的第三者として表現された所に、眞の同情も、血涙も、悲劇の甘味も裕なることが出來るのだ。

立派な衣裳と、立派な面を欲するに過ぎない子供の樣な日本の女に、何所に、人間苦の再現たる芝居を見る資格が在る。

彼等は、芝居小屋へ、立派な人形を見に行くのに過ぎない。こんな連中を相手とする日本の劇の、腐れ切つて居るのは當然である。

妾も一所に進まれば

女は子供の爲めに、自分のすたれて行くことを知らない、寧ろ忘れて居るかも知れない。

女は單に母たれば足りるならば所うである。

併し母たることのみが女の役目でせう乎。

子を持つ女は母として、女の全部を盡したものでせう乎。

女も人間です。人間らしい、人間として普遍性の顯現がなればならない筈だ。

其人間の表はれとしての記號は何です乎。

子供は結構です。併し人たることの出來ない、人たる顯現の何物も有しない母が眞に其子の母たる權利の主張が出來ませう乎。

母としてすら、人間としての完き役目を効すことが出來ませう乎。

否。否。否。母たる前に、人になつて居なければならない。其人たる洗錬の欠けて居るのが日本の女の欠點であります。

子供ばかりに生命を托して、自分は母たる立場にのみ忠實であれば我事終れりと思つた昔は過去であります。

子供の進むと同樣に、人たる自分も進まねばなりません。家庭に意味が現はれて來なければなりません。神の意味が最も漸次に、最も時間的に、序を追ふて、人間たる自分に、女たる自分に、体顯されて來なければなりません。

經驗の增す毎に、新たなる世界が私共の心に痛感されて來るのが、神の御心であります、佛の惠であります。

夫れが毎年、少くも小供の大きくなる樣に、自分に著しいものが無ければなりません。今の婦人たちに之れが在ります乎。單なる女として、人間として。母としてで無く。

こんなことすら考へたことがあります乎。

省みなければなりません。今の日本の女の人々は。

女に理想がある乎

女に理想と云ふものが在る乎。女に自分で自分のあたまの中に、一種感覺を離れた理想の樂みを發見することが出來る乎。

若し現實派と云ふたら之れほど現實派なものはあるまい。彼女等は甘いものを食つて、立派なものを衣て、美しい芝居でも見れば事足りて居る。

之以上には何等の求むる所が無い。極度な感覺主義的快樂派だ。

おまけに、立派な戀でも出來れば猶滿足だ。

彼女等は、自分で自分を樂むことが出來ない。只他人に見られて、おだてられるのが一番樂いのだ。

おだてられないまでも、美しい衣物を着て居る。美しい髮を持つて居る。高いダイヤモンドの指環の持主だと人に言はれ又言はれることの可能が彼女等の一番な誇

だ。

此誇以外の誇は何も無い。即ち人に對する生活、自分で自分を樂むのでなく、人に何ごか思はれることが、自分の樂みなのだ。

我れ自ら我れを樂むことの出來ない生活なのだ。他人の生活を生活するものなのだ。

悲しむべき運命は此所にある。

モ少し新しい誇が生れて來なければならない。頂天立地、天上天下唯我獨尊の立場が、人間として出來て來なければならない。

彼女等の求むる所に大きな變化が來なければならない。

食ふ爲の戀か

女から生活の安定と云ふことを奪つたら、女の節操は何うなる。

日本の廿歳以後の女が、理智を中心とするのは、將來何うして喰つて行くかと云ふことにある。夫には寄生木がなければならない。

此寄生木を發見する爲に、戀と慾とを持つて行く。

男は可い犠牲だ。血も油も女に絞り取られるのだ。絞り取つて生きるが爲めに、女に戀がある。中年の戀が在る。と斯う言はれたら何うだ。

若し女の理智なるものが、只生きるが爲に、寄生木を發見する手段に過ぎないとしたら、其理智や知るべきのみならず、其價値や憐れむべきものだ。

食ふための理智だ。食ふ爲めの戀だ。

吾等は、先づ胃の腑から解放されねばならない。

今の勞働問題の本當の中心も、此胃の腑からの解放を主張して初めて根底的たる

ここも出來るのだ。人間が胃の腑の奴隷となつて居る間は、何うしても人間らしくある譯、無い。

女は夫れにも劣つて、自ら食ふことが出來ないから、寄生木を見附けて、此所へかちみついて、間接に生きて行かうと云ふずるい行き方。此の爲の戀や、此の爲めの理智や、誠に悲しむべきものである。

女は何うしても人格的に獨立して行かなければならない。

ようぞ男に生れけり

夕涼み能うぞ男に生れけり

夕顏棚の下で、丸裸體になつて、涼風腋下に生やさやつて居るのに、向ふから、でこ〳〵丸髷の、赤い帶上げをした、腰へ、ぐる〳〵と厚い布を幾重にも捲き附けた、見るからに熱い、暑い女が來たとする。

あれでは熱い譯だと思はずに居られない。汗で、足へからまる長繻絆に、褌に、上衣さきて居る。歩ける筈が無い。开所へかへりの無いごむ草履と來る。

女は、夫れでも我慢して居る。こんな衣物を着ることが女たる習慣とするから、女は此女の服裝の爲め、此熱さを凌がなければならない。

此時丸裸體で居る夕涼みの樂さから、極度な主觀的の態度を以て「能うぞ男に生れけり」と女の氣の毒さをながめる。

本當に左樣だ。今の女の服裝は、恰度赤兒を、おしめに包んで、身動きもならない樣に縛りつけたと同じだ。

此んな樣に、束縛して育てられたから、日本人は、自我の束縛、奴隷的習慣を何とも思はないのであらう。子供なぞ、一體おしめで。しばり附けて置くと云ふ筈が

無い。三角繃帶の樣にして。子供の手足だけは自由自在に仕て置かなければならない。

今の女の服裝も、あたりまいには强ひることの出來ないほど無理なものだ。

此女に、運動せよ、力强かれ、働け、動けと言つても、夫れは恰も、女を柱へ縛り附けて置いて自由なれと言つた樣なものだ。

此點だけは、能うぞ男に生れけりである。

併し男の心は、其心の束縛を免れざること、女の服裝以上のものがあるかも知れない。

おひな樣の樣な嫁

結婚も、美も、善も、道德も、活動を中心としなければならない。夫れを五等の習慣は、靜止を美なりとし見、善なりとした强い惰力に囚はれて居る。

お嫁さんは、一家の人格で無くて、おひな樣たる飾物に過ぎない。決して生きた人間では無い。十七や十八の子供が、全くの世間苦を知らないで、只おだいり樣の樣に、一家の置物になつて貰はれて行く。

此置物が、姑や、子姑に、いぢられて泣いて行く有樣は、全く日本の如何なる家庭にも存在する大きな悲劇だ。

置物として貰つた嫁に、そろ〳〵人格を認めなければならない自然の結果、此處に一家内の衝突が始まる。

若し始めからお嫁さんに、立派に獨立せる人格を認めて、之れに充分なる意志の獨立と、人格の敬意を以てするならば、おひなさんの樣なお嫁が何にならう。

嫁は一家の重大なる代表者として、二十歳又は之れを超ゑて相當に人間苦の端

緒を知り、獨自の判斷が生れて來たものでなければならない。夫れを床の間の置き物として、人格を認めない吾等の嫁は、之れを人格として認めなければならない時大きな衝突がにじみ出す。

畢竟、人格、嫁や、聟の人格を中心の結婚で無く、家や、閥閲や、習慣の結婚、人としてで無く、物としての結婚の爲めである。斯して夫れは個々の人格の活動に美や、道德や、善を發見しなかつた爲めである。

禁酒令の勇氣

亞米利加が、千九百二十年一月十五日から、全米國に亘つて禁酒を斷行したる勇氣は豪いものだ。此心持だけでも一寸日本人には思ひ到ることが出來無い。

亞米利加に、何うしてこんな心持が出來上つた乎。夫れは餘程前から、各州毎に相當に禁酒令を布いた所もあつて、今では、其半ば以上、實行して居るに相違無いけれども、禁酒令を與へ切つて強行するのは、何ど言つても褒めなければならない酒飲みは、自分の利害から反對するかも知れないが、併も其勇氣だけは認めなければならまい。

吾等は此勇氣を多とする。何となれば、日本人は、其心持ちを理解することが出來ないから。

日本人にはそれだけの勇氣が、五年、十年の間に出て來樣とは考へられないから畢竟婦人の勢力だ。女の力の無い場所には、禁酒令は思ひも及ばない。家庭を一番破壞するは酒である以上、女が生命に懸けて之れを斷行しなければならない以上女の力の無い所では、容易に行はれない。

實現すら行ふことが出來ずに居る。

自由と、正義を、遠き大洋の彼方に求めて、古き故國を去つたピューリタンの血は、今猶殘つて居る乎。其勇氣だけでも美ましい。

日本人には、容易に此心持ちすら理解することが出來まい。

英國の農業婦人

英國の戰時事業に從事した女は、平和と共に皆夫れ〴〵の職業に就く事になつた。其内の土地耕作の業に從つたものは、國家の保護法の下に、小地主として、全くの農業者となつて仕舞つた。

英語のスモールホールダーである。

女の小地主が出來て、此所で一生懸命に、最低賃銀の保障と、小麥買上價格の公定とに依つて、安全に農業に從事することになつた。

夫れから、都會地の住民に特に、疏菜園を供給すべく田舍の土地を國家から割いたものもあつて、此所に從事する妻君も出來た。

斯うして、英國の婦女は、内地植民の先驅となつて居るが、今の日本の女は、都會集中の先驅となつて居る。

女ほど同類意識の盛んなものゝ無い爲めか、何うしても都會をあこがれて行く。都會の淺薄な虛榮が、彼等に一番適切なのである。

都會の空氣を一たび吸つた女は、男と違つて何うしても鄕地に歸ることが出來なくなる。

田舍は、彼等に、最も恐ろしいものになるのだ。

此女が、何時、英國のランドガールの樣に、田園の先驅となることが出來る乎。

あ、吾等は、猶通過すべき幾多の歷史を持つて居る。足はまだ本當に地に着いて

居ない。

平和の女神を見た

英國の、雨ばかり降つて居た一九一七年九月の初め、其大戰の最中、デームス河畔の一村では夕方の曇合を、夫戀しく、息子戀しく打ち眺めて居る幾多の女子供の眼に、明かに平和の女神の天上遙に舞ひ下るのを見たこの評判で持ち切つた事がある

其同じ日に、己れも見た、彼れも見た、こデームスの河の流れに添ふて其水嵩よりも嵩が高まつた。

夫れは恰度日暮方である。西方遙に太陽の落ちんこする水平線上、眞紅から段々茜色こなり、緋紅色こなり、遂に灰色こなる迄の雲の色の間に、天の技巧の數限り無さを示されたが、此將に日の落ちて、雲の灰色ならんこする刹那、平和の女神の遠く天上から舞ひ下つて居られるのを見た。之れは必ず戰爭の終結を語るものでなくてはならない、こ斯う云ふのである。

無論眼の幻覺だ。併も此所に言ふべからざる悲劇を見るこが出來るでは無い乎彼等は常に西部戰場を望んで居るものである。總て之れ玉關の情、何れの時か良人遠征を止めん。月にも、花にも、願はくば影こなつて背の身に隨はんこするもの何ぞ君を思ふて獨り秋夜の長きを嘆つばかりであらう。

此思ひは、女たる身の、母にも、妻にも、娘にも、姉にも、遠征の人を思慕しては、日の入る方を望み、西部戰場を想望して、あらぬ思ひに身を焦すは無理ならぬ事である。

此思ひは、思ひ無き日暮の雲にも表はれて、雨多き同年、英國の初秋偶の殘紅に平和の神の舞ひ下れるを見たこ云ふここの如何に、英國婦人の心根を語り得て餘り

あることよ。

車遙々兮、馬洋々。追思君兮不可忘。あゝ君を思ふて忘るべからず。あゝ、吾等は、あらゆるものを犧牲としなければならない。此慘禍は誠に生命の拍車である。生命を刺擊する強い拍車である。

併も此拍車は、英國婦人と雖も、能く永く堪へ得る所で無い。彼等が如何に平和にあこがれて居たかは、此デームス河畔の平和の神の噂の盛んなのに見ても知ることが出來る。

嫁女のつらい點

、年を取つて來ると、物事の批評ばかりして居る。手も足もあたまも、かなはなくなつた爲めに、まず〳〵批評ばかりすることになる。

本來からは、手足の叶はない樣に、あたまも、役に立たなくなつて居るのを大多數とするけれども、口だけは、よく利く。

おまけに、一切が、新しい進化に反抗の氣分を持つからたまらない。

なぜ反抗すると言へば、昔の儘のあたまから總てを割り出すからである。

新しい進化を理解することが出來ないからである。

初めから、あたまを養ふ文字が無いのだ。

あたまの食料の無い連中が何が分るもの乎。動脈の硬化以上に硬化するのである。

其硬化から、無暗に、在りし昔の慕はしく、昔を今に爲すよしもがなの心持ちにあつては、世の中の進化の總てを否定することになる。

そして世の中の強い流れに引摺られることになる。

年寄りの口やかましい、殊にあたまの零な女、女の年寄りに、さいなまれる嫁は

全くお氣の毒である。

恐らく、こんな矛盾に充つるものは、男よりも、女に一番痛切であらう。

あのかよわい體と、敏感とを以てして、此大きな矛盾に面々相對しなければならない女の矛盾は、全く同情の外無い。

死

死を以て救はる

死ぬほど戀する。死ぬほどあこがれる。死ぬほど求むる。

死を以て求むるものに、與へられない筈が無い。

與へられないで死んでも、夫れは當り前、此所に何等の悔も無い。何となれば死を以てしたのだ。

死を以て求めて、併も與へられなかつたとしても、死と云ふ大きなものを與へられた。少くも死に依つて救はれて居る。

此數ひで大丈夫である。求めたものを與へられたも同一である。何となれば、死乎、無乎であつたから。

此捨身になつた狀態は、人間の最高潮である。

自分を思ふ餘地が無くて、求むる所に全身を投じた。此所に迄求むる所が徹底すれば、何等かの救ひが來るに相違無い。

只夫れが一時的な、アルコール的な發作である爲めに、無價値になつて仕舞ふけれども、眞に一死を以て立つならば、假令ば、四十七士の如きものがある。

假令ばゲエテのフワウストのマガレツトの如きものがある。彼等は、恥を知つて、其仇を報じ、罪を知つて、其當然の報るに安んじた。

死は問題では無い。死よりも求むる所が大きいのである。大きなものゝ爲めに、死を問はないのである。

戀するも、攻めるも、求むるも、死を輕んずるに至つて初めて徹底する。

蓋し世の中には、死よりも大きなものが、澤山にある。

殊に人の道、戀の道、士の恥に於て然るかも知れない。

あゝあの月の姿よ

此頃毎晩の樣に、少し晩くなるゝ後の月の欠けた、憐れ相な併し餘程冴えた色のお月樣が、寒空の中天に懸つて居るのを見る。之れは何を示す乎。

月は少しも變らないが、秋の末の、歳の暮の此頃の月の色は、見る人の心々にさまゞな主觀の色を與ふるに相違無い。

悲しいものは悲しく見樣。泣きたいものは泣きじやくりを月の面に見樣。皆自分の主觀の色を月の上に表現するのだ。

中秋の月を見るこゝを知つて、冬の月、暮の月を見るこゝを忘れてはならない。

吾等は思ふ。あの月は人間の世界の死ゝ云ふものゝ標象では無い乎ゝ。

あーして毎晩々々、我々の眼に人間の末路の暗示を與へて居るものでは無い乎こ。

試にあの月は、生きて居るものゝ皆遭遇しなければならない最後の姿で、何億年の昔には太陽であり、地球であり、开して夫れが立派に生きて居た。今は全く骨になつて、僅に宇宙の一隅にさすらひの旅を續け、太陽から餘光を貰つて、天空を獨り寂しさうに吾等をめぐつて居るものに過ぎない。

开所には立派な墓場の色がある。皆つめたい運命の表はれだ。

年の瀬に、あの暮の月を見て之れを思はないことが出來る乎。

死の嵐の前の向上

死の嵐。戰爭は死の嵐である。こんな嵐が、十年、二十年に一回あるのは當然で之れが無かつたら、餘りに人心が凝結して、堆積物こ、溝渠こ、偶像の爲めに、如何ともすることが出來ないことにならう。

人間、嵐の無い所には、發達も向上も無い。

嵐があつて初めて航海が出來た。花も咲いた。

嵐は、人生に無くてはならないものである。殊に死の嵐ほど强力で、有効なものはあるまい。

人には死ほど恐るべきものが無いからである。

若し吾等に死が無かつたら、斯の世は何等の變化も、進歩も、向上もあるものでは無い。

吾等は、死の嵐、戰爭の慘絶を無くてならないものこ思ふ。

之れ世の流轉、創造を語るものであるからである。

己れの父も死んだ。祖父も死んだ。母も死んだ。妹も死んだ。併し己れだけは矽

なゝいゝと思つて居る。少くも急には死なゝいものゝ思つて居る。自分も死ぬゝ云ふことを眞に體感して居るものが何人あらう。

本當に死ぬことを考ふるならば、人生の大部分は非本質的だ。愚だ。全く死骸の寶冠だ。

先づ第一點を死に

死ゝ云ふものゝ上に、吾れの最初の出發點を置いて、扨て此世を眺め、人世を批判するならば、其百分の九十九迄は、全く無用の長物である。

無くてものばかりである。本質的に考ふるならば、人世は、殆ど總てが影である陽炎である。無價値なもの、無意義なもの。本質的には、全然無用なものばかりである。

虛榮ゝ言ふ。獨り人ゝ人ゝの間に生ずる名譽心ばかりでは無い。吾れ自ら我が本能に追逐せられて、其引摺る所ゝなつて知らず識らず衝動の奴隷ゝなつて居るものを見たい、聞きたい、味はひたい、此所に何れだけ人間の本質的なものがある乎。

死ゝ云ふ最も大きな事實の基礎に立つて、徐に人生を批判するならば、吾等の全部は、虛しきあこがれゝ、求めゝに追はれて、其眞を忘れて居るものである。

吾等は、何ゝかして、人世に其眞を見たい。其眞を行ひたい。其附屬物、其片影の如きは一擲し去りたい。之等には全然無關心の狀にありたい。

吾等の心狀をして、先づ死の上より出發せしめよ。死の上より、世の名ゝ、富ゝ色ゝ、戀ゝ、權ゝ力ゝに思ひ到らしめよ。之等に何れだけの意義がある乎ゝ。

之等のものは、何の爲めに我が現實に存在して、人生の文を寫して居る乎。

名も、戀も、權も、力も、世間苦も、人間苦も、皆我が本質に到らしむる唯一の

鍵ではなからう乎。吾等は吾が本質に看到しなければならない。夫れは先づ死の上に我が第一點を置くここに始まる。

此所に本當の向上の一路あるここが出來る。

奇しきは時間の手

春が來た。又逝く。青春の血が漲つた。やがて肉落ち骨枯るゝ。

今生きて居る、明日は死んで行く。絲屋が金を儲けた。ホット安心した時には生命の無くなつた時であつた。

世間、時間の手ほど森嚴な、併し意味深いものは無い。

「赤死病の假面」は此點に於て如何にも會心の作である。

如何に塀を高くし、門を厚うし、あらゆる衛生設備を以てするも、黑色の室こゝ、

時間の手こゝ、死の影こゝは、遂に免るゝここが出來なかつた。

其前には、總ての生物が、最後にして最大の恐怖を覺ゐる。

開して之れほど面白い展開をするものは無い。繪卷物を繰りひろげる樣に、次から次、一秒後の一秒、何事が起つて來るか少しも前途の分らない所に時間の最奥なる興味を持つ。

其時間の最後のものは死だ。死ぬここは何人も知る所でありながら、此所に到るこ全く何物の以て防ぐここの出來ないものである。

人間が、富だ、權だ、損した、得した、泣いた、笑つた、成金が豪いの、誰が成功したのこ言つて居る間に、此時間の手は、所こ時こを選ばず、總てのものゝ上に落ち來つて、一朝の夢から覺めしむる。

莊周夢に胡蝶こなつた。胡蝶こなつたここが夢乎。人間たるここ其、ここが夢乎。

胡蝶となつたことを夢なりとし、人間たることを夢ならずとするも、誰か其眞僞を知らんやである。

春が來た。直ぐ逝く。往くも復るも皆時間だ。時間の手だ。吾等は此時間の大きな中に、うごめいて居る。

世の、富とか、力とか言ふものが一体此所に至つて何れだけの力があるの乎。

空間の目前のみに生くる人々よ、去つて時間に醒めよ。

人生の色は虹だ

白とは色の無いことである。光の總和である。七色の全部を反射した時に、人間の眼には、白と映ずる。

白の世界は、光澤の世界である。

之れを塗り消すものが黑、黑とは、光の無い世界だ。

如何に光彩陸離燦として、まばゆきものがあつても、黑の力は、此一切を塗りつぶして仕舞ふ。

人間の世の中が、色々に色を着けて、笑つたり、泣いたり、叫んだり、悲しんだりする此色此色彩、之れも、黑に行く途上のことに過ぎない。やがて黑(死)の前には之等の一切が皆吹き飛ばされて仕舞ふ。

佛敎で、人界を色界と言つたのは面白い。色の世界である。

開して更に、人間性の複雜を、あやどる男女間の關係を、「色」と云ふ字に表したことは一層面白い。

此色、此色界、此七色に輝く現世も、光の反對たる黑に對する時、全く三文の値打も無くなつて行く。

之れが、あらゆるものゝ歸結だ。

すべての色は虹だ。

寃術師のフィル

吾々は、赤(一)を最初として、橙(二)、黄(三)、綠(四)、を經て青(五)、藍(六)、菫(七)、此七色の世界を光りの世界と呼んで居る。

此光りの世界に喜んで、遊んで、働いて居る。色の反對の黑の世界は、闇黑の世界として人間の堪へ能はざる所である。

人間の眼には、赤以下の七色より外見ないけれども、實は、科學的に、紫外光線、即ち菫外線のあることを知つた。

紫外線は、何の位ある乎、無論七つや八つでは無い。波長の一番長い赤の外の光線は人間の眼に入ることが出來ず、波長の一番短い紫以外の光線も亦人間の知ることの出來ないものとなつて居る。

光線の波が大きくも、小さくも、吾等に見ることの出來ないのは、非常に大きな音響と、非常に小さな音響(波長)の吾等の聽感に入ることの出來ないと同一だ。

吾々は、光りの世界を僅かに七色に見て居る。併し本當の世界は、开んなケチなものでは無い。

モット〳〵色彩に充ちたものだけれども、人間の五官の貧弱さは、之を知ることが出來ない。

开して一番恐ろしいものがある。夫は黑だ。光りの反對の世界だ。黑は死だ滅だ。

人間は酷く之れを恐れて居る。

此人間の七色を黑で塗り消せ。开所に何がある。死。死。

貧弱なる光りの世界よ。僅かに七色より感じ能はざる、間光りの世界よ。こんなものが、黑い一抹の手に塗り消されることは朝飯前だ。

あはれなる光の世界よ。之を常住だと思つて居るの乎。

覽術師の映畫にも價しない。

ほのほを揚げ樣

人の生命を、暗黑に輝く焰と思ふ。焰は、幾何も無く消えて行く。

細い焰、小さなほのふ。强いほのふ。各々天分に應じて自分の焰を擧げて、暗黑の裡に生れて、暗黑の裡に死んで行く。

自然は、飽迄冷嚴である。斯んな焰があつたか、無かつたかを知らない振をして居る。一向相關し無いで居る。

此の冷嚴な自然の有樣に、失望して、餘りに無情に、餘りに同感無きに自然をうらむに至る。

蒼海の一粟、わが生の須臾なるを哀しみ、更に長江の無窮を羨む。長江は無窮でも、われは露の乾ぬ間の生命に過ぎないを思ふて失望の聲を擧げざるを得ない。

併し自然の冷嚴なのは當然である。彼等、ひややかにして初めて自然なるこそが出來るのだ。有情の人間に進まない彼れなのだ。其自然迄が泣いたり笑つたりしては仕方が無い。其頑然たる所に面白味があるのだ。

自然は瓦の樣に全くなつて生きて居るのだ。生きて進んだ人間は玉と碎けても良いでは無い乎。

まして、吾等は、自然の暗黑裡に輝く焰である。此焰は、やがて「夜は既に更けたり、日將に出でんとす」の第一歩なるをや。

吾等の與へた焔は、輝きとして、決して無駄ではなかつた。此焔は、何所にか傳はつて居る。幷して其焔を擧げた努力の消ゆる頃、うららかな太陽、限無く照らす光明の世界を開いて來る。吾等は、此焔の經驗に依つてのみ次の世界に入ることが出來るのだ。

お互に、此の暗黑の裡に、ほのふを擧げ樣。焔は、熱と光りを捧げて居る。熱と光り。此大きなエネルギーは、決して無駄では無い。幷して靜かに死んで行かう。

此の意味高き洗禮

最も不幸なことは、忽ち死なければならない事であり、

第二の不幸は、何時かは死なゝければならない事である。（ホメールの詩）

樂天的な希臘人が、オリンピックのお祭りに、今日本で流行つて居るマラソン競爭や、劍鎗術や、相撲をやつて、月桂冠を貰つて、何よりも名譽とし、肉体のはち切れる樣な精氣の溢れと共に、誇るに足る榮冠を荷ふて、歡樂の陶醉境を、無邪氣の間に味はふことの出來たのは何よりの仕合せであつた。

併しアポロ（希臘）の神樣も、獨り之れ許りを許さなかつた。幾何も無く東洋の影響を受けて、靜かに冥想沈思を餘儀無くされて、陽氣な希臘的ベールの下に、此天上の平和を搔き亂す何物かを迫出した。然り何人も面と我れと我身に對する時、驚き恐れ、少くも疑はなければならない大きな雲のかたまりを抱く。抱いて而して懊惱する。

此點に於て初めに揭出した言葉は猶やさしいものである。誰れか此不幸を考へずに居られ樣。ホメールの詩に最も能く現はれて居る。

併し吾等人間は、まだ〳〵此所に止まつて居ることが出來ない。必ず次の樣な極

蝙なものにすら出て來る。

最大の幸福は生れない事であり。

第二の幸福は直ちに死ぬることであた。

之れでは全く生活の否定である。ニイチエの大嫌ひな猶太主義である。基督教的思潮である。

只此思潮も、俗物の簡單に考へる樣なもので無く、深刻な、悲痛な并して極めて意味高い思想の表はれである。

之れに同情と、理解と、共鳴の涙の無いものは、人生の深奥なる神の洗禮を受けないものとして、吾等は寧ろ輕蔑の一閃を與へたい。

青年よ、吾等は必ず此洗禮を受けなければならない。之れが自己批判の第一歩である。之れ無い青年は麻疹や、種痘を經ない危險な、幼稚な肉体にあると同一なものである。

此意味高い洗禮を、最も深刻に、最も痛切に、而して最も早く享受せよ。之れ最も善に、最も眞に人間たる所以である。

あゝ凄慘ならずや

露國皇室ロマノフ家は、何と云ふ悲劇だらう。世界歴史内にもたんと例が無い。皇太子殿下迄革命の血に汚されて仕舞ふとは、思ふだに涙である。僅に十五歳の、未だつぼみの何事も多くしろしめなさい萬乘の血を、空しく邊土の馬骨に濺ぎ給はんとは。

露西亞の樣な、革命の劇しい場所では、平素と雖も、常に刺客、暗殺の用意を仕給はなければならぬ。夫れが一層甚だしいものになつて、全く一家の血を絶たるゝ

に至らんとは。

吾等は何を以て此悲しみをたゞふる事が出來樣。

凡て政治上の爭ひほど極端なものは無い。一たび勢失墜する場合には、罪三族に及ぶ。獨り我國の群雄時代の武將に見るばかりで無く、世界の歷史皆然らざるは無い。

英國の暗黑史を語つて餘りある彼のロンドン塔を見たものは、王侯將相生きながらの地獄の跡を踏むことが出來るのみならず、スコツトランドの花はつかしき一皇女さへ、刎られた其まざ〳〵しい實際の場所を足下に目堵する。

陰慘の氣、あたりにさまよふ。旅人の涙を催さぬは無い。外つ國人の吾等すら之である。

若し夫れ羅馬の餓塔に至りては如何。一層凄絕を極めて居る。父子三人政治上の罪を負ふて幽閉せられ、食を與へられざること三旬、遂に、親は子に、我れを殺して我血を、すゝつて生きよと叫び、子は、親に我肉を食んで、父上よ生き給へと哭す。

此所に至つては、モー語ることが出來無い。人生の罪惡も悲劇も此所迄到るものの乎と。皆政治上の爭ひが、總ての遺蘖を絕つて、絕對に後顧の患無からしめん爲めである。

政治上の罪惡。吾等は、今、現在此歷史上最大の暗黑史を露西亞の皇室に繰返さんとは夢にも思ひ設けなかつた。

之を思へば、他の人生の慘事の如き知るべきのみである。

「月曜の自殺、土曜の火事」と云ふことがある。之れは重に歐土の大陸に行はれて居る言草である。

月曜日は、日曜の飲み過ぎ、食ひ過ぎ、遊びすぎで、何とも申譯が無く、今更に悔悟の涙が出て、仕方が無さに自殺する。斯うなると一時性の精神病に取り着かれて仕舞つたのである。

若し良心の苛責が無ければ、實際上の答案が下つて、現實上の欠陷が、日曜明けに急に追ひ迫つて如何とも仕方が無さに自殺する。

日曜のアルコールが過ぎた天罰の如きは之れである。日曜日は身心の安靜と變化と休養を目的とするものだが、實際は、日本も西洋も同樣に、日曜日は、人間の放逸性、矛盾性を發揮する機會となつて居る。

吾々人類の野獸性は、神で無くて人である以上免れ能はざるもの乎、此種の矛盾に依つて、吾が特殊の極樂境を發見せんとして居るのである。

土曜日の火事は、猶太教の影響(ヤソ教)を奉じて居る西洋人は、土曜日に火を焚かない習慣があつて、雇人をして臨時に火を焚かせる爲めに、不慣れと雇人根性から火事を出すのだと云ふ。左樣かも知れない。

雇人根性は、何時も大過の原因となる。大過は、上級の人に少くて反つて馬鹿乎愚人に多い。世の中には馬鹿な奴、地位や、富貴に拘らず、裸体一貫では馬鹿な奴が多いが、此馬鹿程恐るべきは無い。

雇人根性の如き最も能く此所に表はれる。

若し夫れ月曜日の自殺に至つては、大部分の人生、幾何か能く之れを脱し得るものぞ。事實に自殺を示さざるも、月曜日に日曜日を思ふて能く衷心滿足し得るもの幾人かある。

死に面する勇氣

「死」其ものを直視する。まさもに、面こ向つて之を見るこゝは、總ての人に容易に出來ない。

此意味深き死。之を見るのは、斷末魔の最後全く譯が分らなくなつた時でなければ、之に對するこゝの出來ないのが普通である。

所して死の意味深き有樣は總ての人々に、平常全く顧みられずに居る。

併も之れほど大きなものは無い。其大きなものを、出來るだけ顏を背けて居たいのである。

面こ向ふこゝが、恐ろしくてたまらないのだ。

さはあれ、一回は、何うしても來る。來た時には、遑々然驚き迷つて、非常な騷ぎを爲る。

不用意も甚だしいけれども、人生は、其生命を養ふ爲の、パンに追逐せられて、最後たる死には、一點半點の用意すら仕て居ない。

此意味深き死、此意味を、死ぬ瞬間でなければ分らない筈が無い。

死の意味。此點に於て、釋迦は豪かつた。身王侯の家にあり、青春、死の陰影は、如何なるにも之を知らないにも拘らず、自ら生老病死の苦に驚いて、之れを出家の動機として居る。夫が極めて壯年期に於てである。

彼れの此死の用意が、大きな佛敎となつた。

吾等は、恐れずに、面こ死に向ふ心持を平常に持たなければならない。

左樣すれば、衣食のこゝの如き日の前の雪だ。

爾等食の爲に何を思ひ煩らうや、一日の苦勞は一日にて足るにあらずや（耶蘇）

刻々に敗るゝ運命

自分に對する死刑の宣告を判官の目をまばたきもせず、眞向に見、且つ聞いて居ることが出來る乎。

お前は、二十四時間後に死なゝければならない。死ね！と自分以上の力が命令する時、此命令を靜かに、面と向つて聞くに堪へる乎。之れの出來る人は餘程豪いものに相違無い。

あの大西鄕ですら、死ぬ時には、相當に未練があつたと云ふ。

平氣で、死の命令を聽く。容易なことでは無い。

夫れと同一立場に於て、自分に對する批判、惡口、罵詈を、平氣で、面と向つて聽いて居ることが出來る乎。

刻々に迫る自分の運命に面と立ち向つて、其運命を、眞ッ向から味はつて行くことが出來る乎。

世間萬事春風の面を吹いて去るが如しとして、勝敗の如何、榮辱の數をも少しも齒牙に懸けないで、心の何の隅にも、何等の影響をも及ぼさずに洒々落々たることが出來る乎。

自分の勝つ運命の刻々には面をも向け樣。敗るゝ運命の刻々の進行及び必迫をもジット忍んで、靜かに一つ一つ味はつて最後の運命の宣告迄其道途の光景を味はつて行くことが出來る乎。

吾等は、此何れをも味はふものでなければならない。少くも味はふべき慾求に强いものであらねばならない。

敗れ去る運命の刻々を味はへ。之れ勝利である。强者である。心に勝つものは斯の一勝一敗に、空しく地にまみるゝものでは無い。

死乎、幡乎。

昔しの英雄が天下を執つて漸く安心、少くも、當初の目的に近い時には、モー死の影が立派に其あたまの上に漂よつて居る。

其滿足した大きな構の天井裏には、明かに死の神が巣くつて居る。電燈の光まばゆい其輝きの直ぐ上に死の羽音がして居る。

こは今古を問はない。無限の時間、無限の空間に、一貫して居る。

家康は天下を執つて十三年目に死んで居る。賴朝征夷大將軍となつて七年にして墓場に入つて居る。秀吉に至つて稍長く十四年にして、早や骸骨となつて仕舞つた。

やつと之れでよろしいと思つた時には、モー死にかけて居るのだ。家康のあの隱忍慘苦、賴朝の冷腸、秀吉の勞心を以てして、其志ざす所を得るや直に死なゝければならない。

聚樂の第を造つて豪奢を極めても、十四年後には一切を此の世に殘して、人生の線勘定を附けなければならない。秀吉や、家康や、賴朝となつても、死にたくはあるまい。

死乎、權乎と言つたら彼等と雖も、其撰擇に迷つたであらう。

上帝の言葉の理

悠久にして不可思議なる生死を呑吐する大宇宙、爾が如何にもがき出でんとする為能はざる大自然。事實中の大事實。

此事實を如何に打消さんとするも打ち消すことが出來無い。

凡そ存在の權威と云つても、現實に存するもの位權威あるものは無い。

嚴然として存して居る。此存して居る事實中の事實を如何に取扱つても、取扱ふ

ものは、何んであつても、事實は飽く迄事實である。

生を如何ともすることが出來ない。死を如何ともすることが出來無い。

「爾の思ひ煩ひは能く爾の生命を寸陰も延べ得んや」千古の哲言である。寸陰も延ばし得る力の無い人間が、事實を事實として認むることが出來ずに、自ら作り出した假定の理想に獨り自ら高しとすることは何事乎。

爾の憂慮と煩悶とは能く人事の原因を動かし、上帝の雲霧の裡に入り得べしと信ずる乎。馬鹿者奴。

事實は飽迄事實である。吾等は、此所に、血と肉とを見る。此の血と肉の事實を否定して、假想の天地に卑怯なる犬となつて椽の下から他人に吠附いて居ることは、全く自殺の徒である。

人生を舞臺にして見る。皆な世の中へ生れて來て、此舞臺の上で、相當な役を演じて退場して行く。死んで行く。

見物は色々な批評を仕て居る。

立派な役を爲るものもあるが、腰元の「いらせられませう」ばかりやつて居るものもある。

馬鹿殿樣になつて豪がるものもある。

本當に人生の契機に觸れた悲劇の行き詰つた主人公になつて居るものもある。

モー何うにもならなくつて、自分の行き途が無くなつて、毒を仰いで死ぬのは易いが、之れまへ敢てすることの出來ない切ない立場に苦しんで、血に泣く思ひに飄客を、美的境地に導き、暫く世に忘我の樂境を示して呉れるものもある。

美人もある。豪傑もある。

吾等七十年の生涯は、恰度此舞臺だ。人生の舞臺の上に踊りを躍つて居るものに過ぎない。

舞臺を明け渡せ

人間の舞臺の上は、一幕毎に變化の著しいものがある。舞臺面は常に變らなければならない。

此場合一番考へなければならないことは、何時迄も、同じ役者が、同じことを繰返して居ることを許さないことだ。

舞臺が、長く同じ役者にのみ充たされて居ることいやになる。

此舞臺は、段々次ぎ〳〵と明け渡されなければならない。

この明け渡すことを忘れたものは永久に滅る。

人の、自分の使命を果す時は左樣長いものでは無い。一點に集中すれば刹那だ。

舞臺面は變らなければならない。

ウヰリントンは、ナポレオン一世を征伐した豪い人であつたが、選擧法改正を非認して、時代の反抗を受け、彼の最後の頁は、徒らに、時代の進歩を妨げ、世を逆行せしめんとしたものだと、史家をして慨歎せしめて居る。

舞臺には舞臺の約束がある。人生には人生の約束がある。

吾等の存在の權威及び特長は、決して永久なることを許されない。

分らない所に貴さが

人間が一旦落ちて行かうとも、又かの太陽の樣に、再び上れるものならば、不運を悲

しむこともあるまいが、噫、人間の星の落ち行く暗には果しが無い。（帝、ネロ）

斯う言つて死にさも無いこかこつて居る。運命は、自分をあざわらつて、ネロ帝は、自殺しなければならないのに、猶死を出來るだけ逃げ樣とする。

モー逃けることも、何することも出來ないのに、猶卑怯此有樣なのだ。

然り、人間の星の落ち行く暗には果しが無い。

併も彼れは「恐らく余の運命は、星の運命と關連して居る……此世界で人間と星とは二つの謎だ」

自分が、其謎の星の世界的運命を荷つて居ると、一たびは誇つて居ながらも、い

と死の宣告となると、其星の落ち行く暗が恐ろしくてたまらないのだ。

あゝ、死の暗、之は果して何んな暗だらう乎。

日の樣に再び上つて來ないだらう乎。

全く分らないのが死だ。其分らない所に死の貴さがある。

一日中の此の一時間

今病人が、全く絶望に寢て居る。今夜は持つまいと云ふ。此宣告には、何人も死の嚴肅に思はず襟を正さざるを得ないのだ。

死ぬことを思ひ、死んでからのことを考へれば、人間の爭ひは、全くの閑葛藤である。

しなくもいゝ心配をしたり、泣かなくもいいことに泣いたり、下らない喧嘩をしたり、爭つたりして居る。然るに一たび死に對したら何うだ。熱鐵丸上の雪だ。

死を思つたら出來ないものは無い。

斉して必ず一たびは人間の出ッ喰はせなければならないのだ。

己れもアーなる。こ斯う思つた時には、死人は、他で無くて自分だ。併し痛切な此刺戟も、一時間毎に消えて行く。遂には自分は死なないものゝ樣な振舞こ、心持になる。人間は便利なものだ。

蓋し、何時來るか分らない所に餘裕があるからだ。何時自分に來るか分らないだけ、夫だけ恐れなければならないのであるけれども、吾等の心理は、此恐れなければならないことを、反つて、忘れる原因として居る。

然り忘れるのだ。其内に突然、自分に近いものゝ上に、電光の樣に落ちかゝつて來る。其時にはキツトなる。吾等は、此キツトなつた心持ちを、少くも一日中の一時間持つて居たい。斯うしたら何の位人世が嚴肅なものになるであらう。

驚かないに驚く

突然の死に驚くが、人の生には驚かない。生れるこ云ふことは、絶大な不思議だけれども、少しも驚かない。

驚くに慣れて仕舞つたのだ。

ぬつと月が梅に差し出た時には、其大きな、光つた玉は何こ言つて形容し樣。あツこ驚かずに居られない。若し初めて見たこすれば。

生れながらの盲目者が、突然此の世の中の光りを浴びたこしたら、其驚きは何んなであらう。

靈坂寺に死んだ澤市は、觀音の靈現で、生命を吹き返したのみか、眼迄も明いたが、其時の驚きは何んなであつたらう。（義太夫靈坂靈驗記參照）

人間には、一つも分つたものは無い。自身さへ不思議に充ち滿ちたものゝみである。死ぬのも、生きるのも、自分で生死するので無くて、他の絶大な力の支配する

所となつて居るのだ。

不思議が分る譯が無い。其分らない不思議になぜ驚かないの乎。

驚くには、餘りに感受性が鈍感になつて仕舞つた。驚いても驚いても、驚き足りないのだ。

併し吾等は、其驚き足りないのを驚きたい。飽く迄も驚歎したい。ウワンダフルな不思議な世界に眼あきたい。

蓋し人間の小さな世智辛いこゝの如きは、問題にならないからである。

天地別に、人の知らざるものを發見するからである。

人種的年齢

人間でも創造力が無くなれば死ぬのだが、人種でも同じだ。

民族血液の權利も左樣無限に續くものでは無い。

セミチック文明はメソポタミヤで滅びた。人種も無くなつた。巴比倫の王城が如何に立派であつても、其算數的文明は、如何に壯觀であつたにしても、其血液の許すだけの仕事をして仕舞へば、勢滅ざるを得ない。滅るのが自然だ。神の命なのだ。

ハミチック文明の魁たる埃及も、今は、空しくナイル河畔に、英國の所屬となつて死んで居る。

若し英國ならずんば、サラセン人の襲ふ所となつて、其下にあいぎ〳〵生きて行かなければならない。

半月旗に滅された埃及文明は、如何にしても、今の世に再び時めくことを許されない。彼等は其爲すべきを終つたからである。創造することが出來ないからである

人種としての血液の權利が無くなつたのである。

人の無限なることの出來ない樣に、人種も亦然ることが出來ない。

支那は、三千年以前に先秦文學なるものに依り、燦として人間文化の花を開いた併し人種の權利は此所に滅びた。其以後何の創造をも爲すことが出來なくなつた。

創造の無い所には生命が無い。

十たび思ふは痴

人間一たび覺悟すれば、死も亦辭せずである。

覺悟せざるや、色々な迷ひと愚痴を生む。

覺悟が第一である。男子殊に然りである。

一を行はんとして、二たび考へ、三たび思ふは妨げない。十たびして猶一を行ふことの出來ないのは、痴である。

到底爲す無きの徒である。

凡そ人間の彈力生活、創造生活には、必ず危險を伴ふ。

創造することは、新に、造り出すことであるから、當たるか、當らぬか、さつぱり分らない。

分らない所にのみ創造が成り立つ。分つたら本當に創造にならないかも知れない

惰力にのみ生きるならば極めて安全、安全の樣に見ゆる。けれども此所には創造が無い。改革も無い。自己革命などは無論無い。

一を行はんとして、三たび思ふは猶可。十たび迷ふて、遂に爲す無くんば、寧ろ一たびも思はざるに若かずである。

思ふて、行はざるものならば、初めより思ふ勿れ。

少くも潛在意識として、我が氣分を作ることも、決して現在的のものとなす勿れ。

之れ徒らに、自己を苦しむるものである。

運命の奇しき糸よ

怪人物として可なり重きを財界に成して居た升巴陸龍、製鐵所問題で、無罪を言渡されてホット一息して、やれ嬉しやと思つたら、別な悪魔が來た。

出獄の嬉しさに一夜を飲み明した翌朝、立派に風邪を引いて遂に肺炎となり、幾何も無く、死神につかれて仕舞つた。

反つて牢屋に居た方が死ななかつたのだ

何が運命だか知れたものでは無い。何所に神の絲の存在するか、何が幸福で何が不仕合せだか少しも知れたものでは無い。實に不可說を極むる。

併し能く考へて見る。元來幸不幸は、主として本人の主觀の問題で、他人が客觀的に批評するは、單に其上ッ皮に過ぎない。形式的に死ぬことが不幸であり、畢竟は、形式から見たる幸、不幸に過ぎない。

出獄することが幸福とするのである。

若し、死を求めて居るものであつたら、即ち自殺せねばならないと決定した須磨子の樣なものであつたら、生きることが反つて其身の不幸である。

生きて居ることが、死ぬよりも苦しいのである。

ゲエテのファウストの中に表はれるマガレットであつたら、出獄することが彼女の何より恐れる所である。出獄は反つて彼女の不幸である。

蜀山人の「增訂一話一言」の内に

秩父邊の百姓みづから、鐵砲をもて己が胸をうちて死す。その書置に曰く。

うき世にあき果て申候

蜀山人(評)匹夫不可奪志、咄々西行長明一農に愧づべし

讀むもの、之れを何ぞか解する、「あき果て申候」。面白いでは無い乎。

蜀山人の評は能く此間の消息を解して居る。評も此所迄行かければならない。

之れを此儘に、フーンと讀んで何の深味をも感ずる事の出來ないものは、共に人生を語るべからずである。

飲み乾せ、毒をも

形式的、客觀的に見たる他の批評位、間違つたものは無い。殊に幸不幸の如きは、全く主觀的なもので、決して他人が見る樣なもので無いことは確である。

又之れで無くてはならない。

其主觀的にすら幸不幸は、誠に神の試みの無限の變化に表はれて、全く人間思量の外にある。

吾等は只神の裁きに一切を任せる外無い。苦しきも、樂しきも、而して一切を我が主觀の力に依つて、樂しきものとする大きな信念を保持すると共に、總てを擧げて神に與へよ。

人間苦、世界苦の一切を忍べ。而して徐に受けよ。

決して惡るびれてはいけない。神の毒杯ならば、寧ろ其底迄も飲み乾せ。一滴をも殘すナ。

ソクラテスは、之れを飲んで居る。オリンピヤのお祭りに、逃れば逃られたものを、借りた鷄の心配迄して、國法を重んじ、神の杯を受くるを以て、「已れを知る」ものとして、靜かに其一杯を、しづくすらも殘さず嚥下して、何の悔ゆる所無く死所

に就いた。

無辜な運命の毒杯にすら此覺悟がなくてはならない。

飲み乾せ！。之れだ。人間苦も、世界苦も、あらゆる人世に。

本當に死んで見たい

一ぺんは、本當に、死んだ心持になつて見たい。

大死一番して見たい。

あらゆる傳襲、惰力、周圍、事情、因緣から、全部を切り離し、自分一個、頂天立地何物も存せない自分、赤裸々な自分となり、更に其自分をも又殺し去つた絕後の光景に會つて見たい。

开して蘇息する。

禪は、頼りに之を敎ゐて居る。

眞理敎にも、金光敎にも、惡日連敎にも、御嶽敎にすら、一種の鎭魂歸神ごも見られる催眠狀態がある。

人間は、出境に入らなければ居られないのだ。

人間の擾々を、一瞬間たりごも忘るゝこゝ無しには、居られないのだ。

安價なる、極樂境の、酒にあるのも之が爲めだ。酒を人生から離すこゝの出來ないのも之が爲だ。

本當に死んだものゝなつて見たい。一切の今迄の自分から全く中斷された別個な人間ゝなつて、靜かに過現未を省察して見たい。

此所に大きな力が湧かう。此所に大きな生があらう。此所に大きな强さがあらう

开して全然今迄ゝ異つた新なる世界を見るであろう。

時

皆お前を捨て居る

飛び去る。飛び去る。總てのものが、飛び去る。吾等を置いてきぼりに仕て。一つでも自分を棄てゝ行かないものは無い。

在るこ思つて居る所に愚痴がある。

流れる〳〵、流れ〳〵て止まらないのは、皆飛び去つて居るのだ。

流れるこ言つた方がやさしい。みんな自分に置いてきぼりを食はせて居るのだこ言へば、強い。

此置いてきぼりを知らないで居るほご愚なのが人間だ。一つのこゝに執着して、是非之れだけは離すまいこする。之れだけは常世の花よこ求める。

何處に一つも飛び去らないものがある。

之れを飛び去らない樣にしたいこ云ふの乎。

夫れは出來ない。お前が、しつかり握つて居るものでも、何時こはなしに去つて居る。お前を捨てゝ居る。

美人も、財産も、生命すらも。

風も、浪も、星も、鳥も、开してお前の身体も。お前の骨も。

お前は何を求めて居るのだ。

お前の前の時計を見よ。飛び去る〳〵。

酔ふても、醒めても、飛び去る〳〵。

無常なご の言葉では言ひ足らない。飛び去るのだ。飛んで行つて仕舞ふのだ。

早く早く生長せよ

大きくなれ。大きくなれ。今の子供等よ。

進め。進め。今の青年よ。君達の生れた時代の空氣は、著しく變つて居る。君達の產湯の水は全く封建のくさみを拔け切つて居る。

封建の臭味から全く拔け切つたものを其產湯とし、孤々の一聲を此空氣の中に破つたものでなければ、今の世が分らない。

明治十年前に生れたり。慶應文政文化の衣を先づ衣たものは、封建のくさみが甚だしく其產湯の中に殘つて居て、大正の再生的の空氣を理解することが出來ない。

彼等は、封建のくさみを以て、大正の空氣を殺して居る。夫れで一かごの理解者の樣な顏を仕て居る。

けれども、本當には分つて居ない。

生長くなれ、生長くなれ。何うしても生れた時の空氣が、其者一生の空氣だ。

流れる〳〵。殊に躍進的の流れを作り、人類再生の如き今の時代は、到底古い生れの彼等に理解体感されることが出來ない。

分つた樣な古き皮袋が、反つて害だ。

洋服を着たチョン髷が到る所に居る。

生長くなれ、生長くなれ。今の子供等よ。早く。早く。

火刑乎、傳統乎

安息日に人の病を癒したのが不都合だとあつて、キリストは、猶太人から殺さうと決心された。

「我父は人に善き事を爲すには如何なる日をも選び給はず」(キリスト)

キリストは此理想と自信の下に、猶太人の習慣に背いて、人を助けたが爲めに、殺されることになつた。

習慣と傳統に反抗するものは悲しむべき哉。

近世の初め吾等の生活と、何等直接の關係を持たない「地動說」を唱ひてさい火刑を受けた。

地球が動かうが、太陽が動かうが、何の關係も無いのであるが、斯んな立說の自由すら昔は奪はれて、此發見を發表した爲め、其先唱者の身体は、火あぶりとなつて仕舞つた。

習慣と傳統に反抗するものは恐るべき哉。

お互の生活の意義は、傳統生活乎、創造生活乎。創造には大きな冒險が伴ふ。蓋し創造とは、新なる自己を發揮することである。

水と共に流れよ

人間は古くならない樣で、實は、時代から葬られて居るものが少くない。

皆囚はれがあるからである。昔の儘の力を保持して行きたいからである。

何時迄も、同じ岸を持つて居たい水の心持ちなのだ。

自分が水である以上は、低きを追つて、流れ〳〵て止まないものでなければならないのだ。けれども、何か囚はれて仕舞ふと、一定の景色の良い岸か何かに、へばり着いて離れまいとする。

其所に腐敗と、停滯を生み、やがては葬られなければならないが、夫れを、自分では知らないで居る。

流れることを知るには、新しいものを理解する努力が無ければならない。

新しいものを、自我に不便なりとして、今迄の持つものに、縛られて居ては、何

ども仕方が無い。持つものに誇るものに多く此弊がある。

新しい雜誌が分らないで何にならう。新しい思想が分らないで何にならう。

新しいことは、流行でなくて、せなければならないことだ。人間の義務だ。水が流れ〳〵て止まない樣に。夫れが人間の本性なのだ。

所謂成功者、上流者と云ふものに、新しきを知る理解の無いのは、明かに一種の囚はれがあつて、如何ともすることが出來ないからだ。やがて葬らるゝ所以である。

登るに從つて孤獨也

我れ登るに從つて愈寂寥に、攀るに連れて益々孤獨に……然れども高山の登攀は吾が生活の意義也。（ニイチエ）

之れだ。吾れも進むに從つて、益々孤獨を覺ゆる。恰も高山に進むが如きものである。之れが豫言者の立場である。

孤奇嶮峻なりと雖も、高山登り難きにあらずである。登り難しとするものは、自ら侮るものである。けれども、人の進むに從つて、いよ〳〵孤獨を感ずることは、總ての人の覺ねなければならない運命だ。

俗物と混じて、共に泥を揚げることは、一番氣樂である。盲者盲者と相率ゐて行くことは、何より安心である。自ら盲者たることを知らないで居るからである。

高きに登つて初めて獨自一己の力を感ずる。門閥を去り、權力を剝ぎ、富力を奪ひ、吾れと吾が力に自覺し來る時、初めて、人間の人間らしい何物かを覺ゆる。

吾等は、自ら高く進むに從つて此力を覺ねなければならない。又覺ゆるを餘儀無くされる。

吾れ「登るに從つていよ〳〵寂寥也」とは此處だ。

吾等は、煩惱即菩提なることに体達しなければならないけれども、併も、眞に孤獨に生き得るものにして初めて、天下に事を爲し得る。

人を相手にせず、天を相手にする超脱をも體驗することが出來る。

「吾れ變らざらん乎、吾れ死せる也」とは、言ひ得て妙。吾等は變らなければならない。生きて居ることは、變ることである。

其變ることを生命とするものは、世間の何物をも恃まず。只獨自一己の我が力を感じて居る。此力は、最も、進むに從つて寂寥を感ずるけれども、益々火の如く吾れに燃ゆるものである。

吾等は、此強い自信あるべしである。

本當に大事な若い時

鐵は熱きに鍛へよ。時を失つては、何にもならない。其内でも、青年ほど大事なものは無い。

青年の時を、姑息の内に漫過すると、モー年齢を仕ては仕方が無くなる。

乾坤一擲的のことを爲樣と思つても、時が許さない。年齢が許さない。若し行つても、精力の充溢を缺いた青年期以後の冒險は、機會を一髮に失する。

青年時代ほど貴いものは無い。青年は、此時期を思ふだけ適切に使用する必要がある。

モー元氣のなくなつた五十、六十になると、何事も硬結を善なりとする。斯うなつては、生命の燃燒は勿論、其飛躍の如き到底思ひも及ばぬ。

あゝ生命の飛躍。之れ獨り青年にして初めて爲し得る所である。

吾等の心理的革新の如き、現實の革新と異なり、妥協や、苟合を許さない。徹底

したる、鮮明なる、或は極端から極端なる變化を必要とする。決して心理的革新には、徐々とか、自然とか、云ふ手ぬるい革新を許さない。

此の如き革新的氣分に充つることは、絶對に五十、六十の徒に望み得ない。

青年は、此點に特殊の權利を有して居る。此權利を忘れる青年は、青年期の尊貴を泥土に擲うつもの、吾等は切に青年の徹底せる革新的氣分に生きんことを求める。

況んや生活に對する乾坤一擲的氣分の如きは、青年期にあらずんば爲し能はざる所である。

青年の心を蟲くつて居る

今の青年の本當の惱みは、昔の青年の知らない所である。況んや昔の自分の青年時代の惱みを忘れ果てゝ、全く青年を理解することの出來ないものをや。

夫れから、青年時代に何等の惱みをも有することを無くして、極めて鈍感に經過した一部の老年なるに至つては、全く現在の青年の惱みを知ることが出來ない。

今の青年には、昔の人々の知ることの出來ない別な、深い惱みが在る。

夫れは戀からでは無い。夫れは現實矢望のなやきからでも無い。何となき過渡期の哀愁の情でも無い。

維新以前の思想と現在の求めとの衝突。自分の理想の發はれたる時處位と、惰力に充ちた現實の矛盾と。之等のものが、昔の青年の全く知らなかつた力强さに於いて、今の青年の心を蟲くつて居る。惱まして居る。

時には。如何ともすべからざる煩悶さへなつて來る。

親と子、隨分其方向の差に泣かせられることがある。

家と財、隨分此爲めに血の涙の止む無きことがある。

鬼も角も、今の青年には、青年期其ものの哀愁以外、現代的矛盾に惱む青年の煩悶は數層なものである。

古き世界を苦しめ

古き世界の一切を苦しむことに依つて、新しき世界に生きることが出來る。

古い世界を回避することに依つて、新しい世界の光明を失する。

古い世界から見た新しい世界の光明、此光明は、古い世界を苦しむことに依つてのみ知ることが出來る。

古い世界を苦しまずには、新しい世界の光明は分らない。

吾等は新しき以前に、古いことを覺悟する。古いものゝあることを前提とする。

故に此古いものを恐れてはならない。まして之れを回避するをや。

避けるほど卑怯なことは無い。吾等は行くべきに行かなければならない。

新しきに生くるものは、飽迄古きを体感体驗しなければならない。

吾等は徹頭徹尾純眞でなければならない。眞摯でなければならない。

苦しむことは、救はるゝことだ。夫れは純眞だからである。眞摯だからである。

眞面目に苦しむからである。

悪は善の不完全なるもの

世に悪天候なるもの無し。元こ之れ好天候の一種也。（ラスキン）

斯う悟ることの出來る人程仕合せである。上ッ面の悟りで無くて、眞に斯く體得して居るならば、其人は「苦痛を變じて快樂こ爲し得る人」である。

碧巖集の「日々是好日」である。如何なる日でも結構。雨の日も、風の夜も、皆之

れ好天氣の一種とすることの出來る人は、眞に、苦痛を快樂と爲し得る人では無い乎。

苦痛を變じて快樂と爲し得る主觀の力、心の力が無ければならない。主觀は客觀を支配す。何と云つても、苦樂は、吾が主觀の態度である。否、あらゆる客觀は、根本に必ず吾れに映ずる範圍に於て主觀的ならぬものは無い。

主觀の力なる哉。惡天候を以て好天氣の一種と爲し得るものは、誠に「火も亦涼し」に味到することの出來るものである。

「惡は善の不完全なるものなり」とは有名な言葉では無い乎。世の中の總てを善と見て、惡は、其至らざるものなりと爲す所に吾等の力がある。主觀がある。立場がある。

時のリズムが流れる

流れる〳〵、何時迄たつても流れる〳〵。時が、時のリズムが。

開して、決して歸つては來ない。東流、西流、皆海に歸するが、人の世の流れは海の一鹹味すらも知らない。

恰度死んだものが、何んなにしても歸つて來ない樣に。

時代は流れる、〳〵。

封建が變つて立憲となつた。

併も封建其儘の道德もあれば、心持ちもある。

人を奴隷の樣に、こきつかつて、夫れで居ながら恩でしばり上げる。

片手にはパンを提げ、腹がへつて〳〵て眼もくらみ相なものを、汗をだら〳〵かかせて、油に洗はせ、片手は、恩と云ふもので、くくしあげる。

人間の生命を、毎日雇主の爲めに、主人こやら云ふものの爲めに使ひへらして、其上に恩だこ云ふ。

封建時代は、使用人、百姓は人格では無い。人間の樣な面をした貨物に過ぎない流れる〳〵。時代は變つた。時は移つた。貨物は眼をさました。奴隷はなくなつた。我れも彼れも皆人だこ知つた。

流れる〳〵。併も此流れに背いて、一向に知らないで居るものがある。分らないで居るものがある。

時は過ぎ行く。并して再び歸らぬであらう。

之れを知らないで居られるものは。幸乎、不幸乎。死乎。生乎。

流れる〳〵。又流れる〳〵。

時は、大きなリズムを作つて、至妙な音樂をかなでつゝ去つて居る。

流れる〳〵。

お前達は支那乎、露乎

お前達は、現在を價値こする乎、過去を價値こする乎。將た未來を價値こする乎。

日本人は、何れの價値を重しこする乎。

此好個の對照を爲すものは露西亞人こ支那人である。

支那人は、理想の世界を、獨り堯舜三代の世に求めて、現在を墮落なりこした。

支那の歴史は、四千年間、墮落の過程である。何時の世か三代又は先秦孔子時代に及ぶものがあつた乎。

從つて彼は、一にも、二にも過去を貴ばざるを得ない。黄金時代は、支那歴史の一番最初にあつて、其以後に無い。

此國民は、過去を價値とする譯である。

之に反して、露西亞人は、最も理想、夢想の世界に、あこがるゝもので、現世にあきたらず、何うかして、特殊のユートピヤの世界を開いて、現實の苦痛を免れ樣として居る。

彼等は、空想を追ふ夢の國民である。何とかして、此現世的牢獄を脱出せんとしては、自殺者を最も多く產出する露西亞人である。

他國民に見ないトスカ病すらあつて、突然索觀の極、自殺するものが甚だ多い。

彼等は過去にも、現在にも價値を感ぜないのである。

獨り未來にのみ、あこがれる。未來(來世にあらず)未來の世界、黃金地上の世界にのみ價値を求めて居る。

されば、露西亞の政黨は其主張する所、過去の政蹟にあらずして、未來の施政である。其未來の施政すら人を喜ばす空想的なものであつたら、最も人氣を呼ぶことが出來るのである。レーニンは夫れだ。

支那人は、過去に、露人は未來に價値を感じ、日本人は、如何なるに最も多く價値判斷を持つ乎。

日本人よ、お前は何が一番な價値だ。封建のチョン髷以後僅かに五十年の今の日本人は何が價値だ。敢て問ふ。

働くものよ夜は必ず明ける

何時あくるとも分ちがたき暗やみの中にも、或る解放の日が徐々に近づいて居る

解放の日が必ず來るから、開所に向ふ總ての準備がなければならない。

解放は、一時に來ることが出來ない。一端から一端には必ず中間を通過する以上

一時に殺到することは出來ない。

但し徐々に來つゝある。夜は必ず明けなければならない。決して失望してはならない。總ての青年よ。働くものよ。努力するものよ。

而して理想にあこがるゝものよ。吾等は、此あこがれの上に、我が筋肉と意志とを鍛錬し又鍛成されなければならない。

壓下される迄の、名狀し難き、いきつまる樣な重苦しい苦痛や、霧圍氣の下に於ても、決して失望してはならない。やがて、成効の曙が來るであらう。

吾等は、常に理想と現實に、吾れ自らの意志と筋肉とを鍛成して行かなければならない。

無爲と失望はご吾等を墮落させるものは無い。雄々しく現在を忍び拔かなければならない。此所に眞實に生きる所以がある。

科學の進歩は恐ろしい、今は全く動力の時代、動力さへ安く供給する方法が立てば、如何なる工業をも起すことが出來る。

此點に於て、殊に電氣の時代だ。水力電氣と磁氣とは同じものだが、夫れが動力にもなれば光にもなる。

皆位置のエネルギー。高い所から低い所へ落す位置上の變化に起るエネルギーを執つて、光と爲すのみならず、最も大きな動力として居る。

マア此光だけから見ても、此頃の電球の晝光色、更に新しいあの柔かい光の照し方。

夜の世界が、晝の世界よりも、何となく心持良くなつて來たのも皆電氣の爲めだ。

實際、晝の太陽の光りは、何となく男性的で、強い刺戟を持つて居るが、夜の晝

光色電球の放つ光線は、言ふに言はれない柔か味がある。

太陽色に似て居て、併も夫よりも刺戟の薄い所にあま味がある。

夜と晝と心持が、ひつくり返るかも知れない。

行燈や、かんてら時代を考へれば、全く之れこそ隔世の感、地獄と極樂ほど違つて居る。

こんなに違つて居る物の世界に住ながら、心の世界が封建時代其儘に在つて、吾々を支配したら如何。

古い惰力が夫れだ。吾々の心持の内に、かんてら時代そつくりに、近代的の洗錬を受けない力が所在に、ころがつて居るとしたら如何。君子日に三省すは此所だ。

衝突せよ　體感せよ

古いものが、古いものにだけ囚はれて居ると云ふことは、明かに智的盲目だ。

新らしいものが、新しいことにばかり、價値觀念を持つて居ることも、明かに智的盲目的だ。

これ盲者と盲目の衝突である。衆盲相率ゐて、溝壑に轉落するものである。

世の中は、こんな、つまらぬ嘩喧を、何時でも、同じ樣に繰返して居る。

考へれば馬鹿らしいけれども、此衝突あつて初めて、智的盲目を開くことが出來るのである。

此衝突が無ければ、何時迄も盲者で居る。盲者を眼明にして呉れるものは、獨り衝突である。

吾等は、衝突を喜ばなければならない。

蓋し衝突は、最も能く體感を敎ゆるからである。舊が新に衝突し、新が舊につきあたつた時に起る燃燒と、閃光之れが双方の眼を、最も能く明けて呉れる。

此閃光にも、此燃燒にも、生命の擴張を感ずることの出來ないものは、死なゞければならない。此燃燒の閃光に中つて震死しなければならない。

現實と理想の燃燒、甲と乙の閃光、皆之れ双方に其體感、體驗、體得を强ゆるが爲めだ。

此燃燒と閃光無くして體感し得るものは天才である。併し凡人は此衝突に依つてのみ其眼を明けることが出來る。

吾等は智的盲を出來るだけ多くの衝突に依つて出來るだけ多く打明けなければならない。

子の如く親も進め

年毎に同じことを繰返す樣であるけれども、之れが單に繰返すものであらう乎。

單に繰返すものであるならば、夫れは其國家の不幸である。其個人の不仕合せである。

何となれば、其國家及び個人は死んで居るから。

去年以來死んで居るから。

生きて居るなら、去年より今年、今年より來年と何等かの變り目がある。變つただけの値打がある。

よし不幸が多くなつても、病氣が增しても、墮落が加速度であつても。

其多くなつたことに變化がある。多くもゞくもならないことは、明かに死んで居るのだ。

子供は盛んに大きくなる、毎年ごころか、毎日大きくなつて居る、子供に全生命を托して自分は何うでも可いものなら、子供の大きくなるのに、自分の變化を見て

居るかも知れない。

併し子供は子供だ。子供が日に新なり又日に新なる爲めに、親が其儘死んだも同然であることを許されない。

子の如く親も進まなければならない。子の進む故を以て、親の停滯は絶對に許すことが出來ない。子以上に、變らなければならない。

併も其變ることに、萬物普遍な、共通な、开して神のお思召たる進化が、顯現されなければならない。

去年と同じ新年は死だ。

支那へ行け青年よ

支那は元來、漢族の、北方河東の地から、南方の蕃族追逐の歴史で、南方には、現在の漢人種に敗けた例の苗其他諸種な舊人種が居た。

南方種は、由來感情に富んで、何でも、やッつけろ主義に生れて居るから、此處に持久的な勢力を認めることが出來ないとしても、新たなる刺擊と轉回の先づ起るのは此南方人種である。

雲南の獨立は、明かに之れを語つて餘りある。

支那は如何に强辯しても、今の儘では、到底立ち行くものでは無い。必ず非常な變化を受ける。

吾等は、分裂の運命既に其頭上をさまよふ事を信ずるが、夫れ迄には猶多少の時間を要する。

只時間の問題である。

日本人は此際會を、何と見て居る乎。遠く亞米利加や、南洋も差支無いが、畧決

極まり無い支那四億、四百餘州の大廣野は、目の前にぶら下つて居る。之れに對して全く風馬牛で居られる乎。

支那は何うしても東洋禍亂の釀成地である。吾等は、一寸さも此地の研究を忘れてはならない。

此の小さい日本の山の中で、下らぬ遠慮や、せゝこましい、あたり障りを考へて。碌なくやしみも出來ず、箸の上げ下しにも、四邊近所を心配しなければならない、小天地にまご〳〵して居て何うなる。

行き往いて一重又一重の山又山、此所に活動の天地は無い。茫々として平沙極まり無い所に、人間生れての生き甲斐ある活動を見ることが出來る。目前の支那は、首を長くして志あるものゝ手腕と精氣を待つて居る。

青年の徒、宜しく支那に走るべしである。

古き價値は骨董のみ

先輩とは、後進、青年に凌がるべきものである。然り、年ばかりの先輩は、物質だけの先輩は、硬化したる先輩は。

先輩とは、精神的生命に於て、常に世に勝つて居るものでなければならない。

古いものゝ何時迄も、其古いことを權威として、豪いものゝ樣に思つて居るのが硬化、衰耗の證據である。

金を溜めると云ふ物質的なものは、其硬化を喜ぶ。物質は總て硬化を特色として居るからである。

精神は、物質と反して、常に變化流動を生命として居る。流動が無ければ生命が無い。生命の在る所には必ず流轉變化がある。物質は硬化し、精神は流轉す。

此流轉と硬化の衝突が俗世の紛紛となつて表はれる。

古いことの貴きは、唯骨董だけだ。新らしいものには、古いもの以上の權威と生命とがある。

時は過ぎ行く

世の中は、猫の眼玉の樣に、くる〳〵回轉して居る。猫の眼玉は又元へ戻つて來るかも知れないが、時は、永久に過ぎ去つて一回來たものは再び來ない。

海邊に立つて、太陽の西へ落ち行くのに、何の位の速力があるかと思つて火の盆の樣に大きく見える落日の半分ばかり海の中へ落ちたものを追ふて、大驅け足で、山の上へ登つて見た。

地球の圓い以上は、此方の視界の上ると共に、日の落ちるのが幾分でも取り返されねばならない。少く共或程度迄落ち行く日の停止を見なければならない。

非常な速力で、山へ驅け上つたが、何の役にも立たなかつた。四十秒と經たない內に、モー三分の二を沈めて什舞つた。九十秒を算した時には、火の盆は、全部其姿を水中に沒した。

日は沒した。眞夜中が來なければならない。

併し又日出づることがある。出でゝも、モー太陽も、地球も同一の軌道を行くので無くて、多少變つた別な途を通つて行く。

少くも、人間は、刻々に死の途に就いて行く。

今月今日今時は、此一セコンドを離れては、永久に歸り來ることが出來ない。

時は過ぎ行く。時の貴さを、しみ〴〵と感ずることは、やがて時に生くるものでなければならない。時に復活するものでなければならない。時の價値を知るものでなければならない。

笛の音と云ふものは、何となしに人を過去の昔に呼び返す。

朗々として、泣くが如く、訴ふるが如き哀音、尺八なぞに至つては、遠く之を聞くに於て全く現實からの葛藤を遠ざけて呉れるのみならず、自分を過去の過去へと連れて行つて呉れる。

音樂に依つては、或は未來に、或は遠距離に我れを運ぶけれども、日本の大概な音樂は大方過去へ過去へと我れを連れて行く。

極樂境は、獨り未來にばかりでは無い。獨り現實我を忘れる際にばかりでは無い遠い遠い自分の過去へ連れて行つて呉れる時、自分の小さかつた、ちよろ〳〵小川のいざりの思ひ出、此所にも一種の極樂境を發見することが出來る。

極樂境を、何からか執らなければ居られない。吾等は、酒乎、女乎、碁乎、將棋乎。何かに現實我を忘れ了したい。現實の葛藤から拔け出したい。夫れには、遠い〳〵空間の差で、救つて呉れる作用もあれば、時間の差で未來へ未來へと行くこともある。

併し過去へ過去へと追ひ戻されて、全く得知らぬ極樂境を今更に眼前まざ〳〵と呼び醒まされることもある。

夫れには笛だ。笛の音は吾れを過去へ、過去へと連れて行く。此過去も亦一種の極樂境である。

低い天分では無かつた

西鶴の「置土產」を讀んだ。矢張り豪いものだと思つた。

あの享樂時代に之れだけのものがあつた乎と思つた。